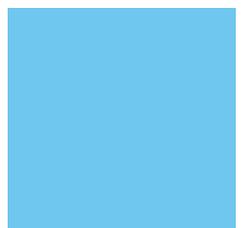
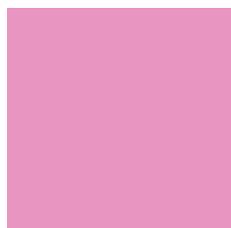
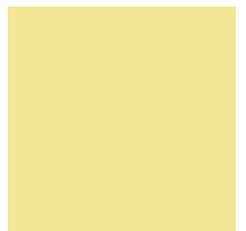
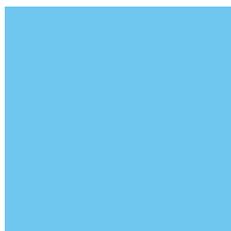
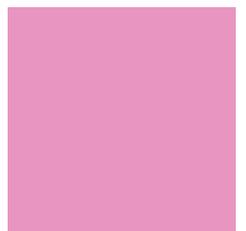
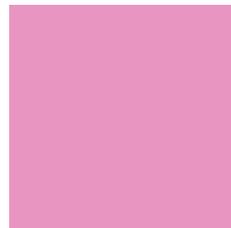


保育子育て研究所 教育保育研究所 年報

名古屋短期大学保育子育て研究所／桜花学園大学教育保育研究所

2012年度

—第10号—



目 次

はじめに	【中村淳子】	2
2012年度 第10回夏季保育研究セミナーの報告	【神谷妃登美】	3
2012年度 講演会報告		
「絵本から広がる世界」	【田代康子】	8
「絵本から広がる世界」～ 田代康子氏の講演を聴いて	【布施佐代子】	21
研究報告		
スウェーデンの環境教育、「森のムツレ教室」を実践して		
【嶋守さやか・青木佐和・伊藤絵里奈・八反彩織】		23
「共に共有する」音楽づくりを考える		
－シアトルの子育て支援や幼児音楽教育の実践から－	【高須裕美】	32
実践記録		
いっぽんばしわたる－絵本のイメージを表現してみよう－		
	【古田美津子】	40
資料		
2012年度 事業報告		
第10回夏季保育研究セミナーのアンケートから		48
講演会のアンケートから	【布施佐代子】	50
子育て支援講座		51
子育て交流会の経過・参加人数・内容		51
奥付け（執筆者）・編集後記		

はじめに — 連携と独自性 —

2012年度の年報は、第10号という記念すべきものですが、名称も従来の「保育子育て研究所」に加えて「教育保育研究所」が併記されることになりました。これは、桜花学園大学の卒業生が保育所や幼稚園だけでなく、小学校等にも勤務する者が増えつつあることに鑑みて、名古屋短期大学とは別の、大学付属の研究所を本年度から設けたことに由来します。

「小1プロブレム」と言われる、小学校1年生の教室で展開される子どもたちの荒れた現象は、就学前教育（保育、幼児教育）と小学校教育とがうまく接続していないことを意味するものでしょう。幼保連携、幼小連携などは、国の施策としてかなり以前から取り組まれてきた課題です。子どもの成長や発達、順序性や連続性のあるものですから一貫した保育や教育体制が求められるのは当然のことと思われまふ。しかし、子どもが実習の巡回指導で垣間見る限り、うまく連携できている事例は少ないのが現状です。その原因を尋ねてみると、「学校と連携したいのはやまやまだが、日々の保育や教育に追われて、せいぜい1学期に一回程度の交流で終わってしまう」というのです。一方、うまく連携できている例では、「保育所と小学校が隣り合わせで、夏のプール遊びや運動会などの行事は共同でやっている」「幼稚園と小学校で連携し、絵画や発達支援の共同研究会を行っているので、日頃から教諭と保育者が親しい関係にある」とのことでした。つまり、距離的にも心理的にも近いことが連携しやすい要件のようです。

就学前教育と小学校教育のスムーズな接続には、連携や共同が重要であることは間違いありません。しかし、保育所・幼稚園での保育や幼児教育は、小学校教育の単なる準備期間であってはならないと思います。幼児期に育てておきたいこと、この時期だからこそ体験できることがあるはずでふ。“泥団子づくりに夢中になる、遊んで、遊び込んで仲間とくっついたり、離れたり・・・。”そんな体験を通して、正しいこと、美しいこと、善いことを全身で吸収していく子どもの姿がみられます。まさに幼児期は人間形成の基礎を育む時期なのです。この独自性を忘れてはならないと思います。そして、小学校教育では発達を見据えた様々な学びを子どもたちに授ける使命があり、幼児教育とは異なる、独自性があります。先に述べた「小1プロブレム」は、この独自性の尊重と連携の大切さを疎かにした結果のように、思えてなりません。

本学園では、「保育子育て研究所」と「教育保育研究所」の双方に所長がいます。しかし、運営委員は、両研究所のメンバーで構成されており、すべての事業を共同で行っています。したがって、連携は十分にとられており、2013年度からは共同の相談部門を立ち上げようと準備をしています。独自性については、この体制となって間もないことから、正直なところ十分とは言えません。現在、双方の特徴を生かした活動を模索中です。

一昨年私たちは、東日本大震災という^{かつ}曾てない、恐ろしくて悲しい体験をしました。多くの人が、これまでの生き方や価値観を見直し、これからの生き方について考えさせられた2012年だったのでないでしょうか。とりわけ、未来に生きる子どもたちのために何ができ、何を伝えるべきなのか、大人たちには考える責任があります。

2013年度は一層、両研究所が連携し、また独自性を生かしながら、子どもたちの未来に貢献できる活動を、研究員の全総力をあげて行っていきたくて考えております。

2013年3月
教育保育研究所 所長 中村淳子

2012年度 第10回夏季保育研究セミナーの報告

本学卒業生を中心とした若手保育者対象のセミナーを、下記のプログラムにそって開催いたしました。卒業生が、講師の先生のお話を聞いて楽しいひと時を過ごしたり、日頃の思いを先生や仲間に話したりして、元気を取り戻せるような企画にしました。

記

日 時 2012年7月29日（日）

場 所 名古屋短期大学 桜花学園大学

主 催 保育子育て研究所 名古屋短期大学

教育保育研究所 桜花学園大学

対象者 保育者

参加者 256名

（名古屋短期大学 123名 桜花学園大学 110名 学生 14名 その他 9名）

<午前のプログラム>

10:00～

開会式

○あいさつ 高田吉朗（保育科学科長）
左口眞朗（保育学部長）

諸連絡

10:15～

講演会 **「お帰りのさい 今日一日学生に戻りましょう！」**

名古屋短期大学名誉教授

小西 由利子 先生

12:00～13:10 昼食・休憩

<午後のプログラム>

13:10～14:40 1限 分科会 （場所） <担当者>

A 実践屋台村+手遊び村 （食堂） <浅野・高田・田中・田端・中川・水谷>

B 乳児保育	(721 教室)	<高柳・辻岡・寺島・布施>
C 幼児保育①	(722 教室)	<岡林・鏡・神谷>
D 幼児保育②	(723 教室)	<石山・大澤・基村・嶋守>
E 特別支援保育	(724 教室)	<小川絢・今野・中村・山下>
14:50～16:20 2限 分科会	(場所)	<担当者>
F 実践屋台村+手遊び村	(食堂)	<浅野・高田・田中・田端・中川・水谷>
G 乳児保育	(721 教室)	<近藤茂・高須・平野>
H 幼児保育①	(722 教室)	<金子・豊田・古畑>
I 幼児保育②	(723 教室)	<岡林・神谷・原田>
J 保護者支援	(724 教室)	<上野・小嶋・橋本・ブストス>
K 小学校・学童などの関係者	(725 教室)	<辻岡・杉浦・吉田>
13:10～16:20		
職場相談	(管理棟1階)	<野津・藤田>

講演会の記録

本年度は、講師に名古屋短期大学名誉教授の小西由利子先生をお招きし、「お帰りなさい 今日一日学生に戻りましょう！」と題して講演会を行いました。小西先生は、保育者はどうあるべきか、保育の楽しさや難しさなどについて、ご自身が保育者として勤務した頃の話をもじえながら、ユーモアたっぷりに語られました。歌に合わせてみんなでミュージックベルを鳴らしたり、リズムから曲名をあてたりもして、会場が楽しい雰囲気いっぱいになりました。

小西先生は参加者に「大学・短大ほどいい所はありません。学生生活を『思い出さずに忘れずに』過ごしていますか」と問いかけられました。その言葉でみんなは、学生の頃の楽しかった気持ちがよみがえり、和やかな雰囲気になりました。

保育者は大変な仕事だけど、あなたがこの道を選んだので頑張りましょう。だれでも初めてのことはうまくできるはずがないので、まず、人に言われたことは素直に受け止めること。そして、自分の意見を言う時は、謙虚な気持ちで言うことが大切と、謙虚さや協調性の大切さを話されました。

保育は1年経験するとどんなことをやったかわかるようになるが、まだ見通しがもてない。見通し



が持てるようになるのは5年くらいかかるので、年を積み重ねることが大事。積み重ねがあるからいろいろなことがわかるようになってくると話されました。保育経験が浅く、毎日が不安や戸惑いでいっぱいだった参加者は、その言葉を聞いてほっとした気持ちになったようでした。

そして、「保育者には私しかできないという思いや使命感があってもいい」という先生の言葉で、保育者になりたいと思って学んでいた頃の思いがよみがえったことでしょうか。保育者の仕事は、1年や2年でできることではないので、繰り返し続ける強さがないといけない。続けるのは大変だけど、なぜこの道を選んだか忘れなければ続けられると励ましていただきました。



途中で「ちょうちょ」「ぶんぶんぶん」「きらきらぼし」「めだかのがっこう」などの歌に合わせて、みんなでミュージックベルを鳴らしました。日頃、子どもと一緒にうたっている歌も、ベルの音が響くととても心地よく聞こえました。

また、楽譜に書かれているリズムを打って、曲名あてクイズもしました。「メリーさんのひつじ」「こいのぼり」「ぞうさん」など、みんなよく知っている歌ばかりでしたが、リズムから曲を探るのはなかなか難しく、参加者は机を打ちながら思いついた曲をうたう姿があちこちに見られました。小西先生は、「小さい子には、メロディーやハーモニーよりもリズムが大事。子どもは、面白かった楽しかったと思うとまたやってみようという気持ちももてる」と言われました。みんなでトルコマーチのピアノ演奏に合わせてリズムを打ちました。その時は、会場中に軽快なリズムが響いていました。

最後に、新任保育者の気持ちを歌にした「輝いて この1年」をみんなであうたい、保育者の道を歩き始めた参加者を励ましていただきました。若さあふれる小西先生のお話を聞いたり、リズムを打ったり、みんなであうたりしてあっという間の2時間でした。



午後のプログラム **分科会の報告（担当者報告書より抜粋）**

○実践屋台村＋手遊び村

参加者は180名でした。実践屋台村では、いやし棒やどろだんご・恐竜の卵などを作り、動かした時の面白さを楽しんでいました。手遊び村では、学生が作った手遊びや新しい手遊びの紹介がありました。参加者は、現在、園で流行している手遊びを披露し合って交流する姿も見られました。



○乳児保育

参加者は60名（1限42名・2限18名）でした。それぞれが感じていることや悩んでいることについて報告してもらったところ、主なものとして、かみつきをする子と被害を受けた子への対応、職場の人間関係に関する悩みの2点があげられました。特に「かみつき」については、多くの参加者があげており、乳児担当者の悩みとして根深いものであることがうかがえました。職員間の人間関係やコミュニケーションに関する悩みも、参加者の多くが抱えていることがわかりました。これらの問題点について、対処法の事例や提案が示され、その後、ディスカッションをしました。参加者同士で改善策を考えたり、成功体験を話したりして有意義な話し合いができました。同じような問題を抱える仲間と話し合えたことで、今後の励みになったと思われま



○幼児保育

参加者は55名（1限39名・2限16名）でした。母親と離れられない子、家でのストレスが原因で乱暴になる子など、子どもの気にかかる姿があげられました。その時の子どもの気持ちを考えたり、自分だったらどうするかなど話したりするうちに、「こうしてみよう」という考えも浮かんできたようでした。また、クラスの子がまとめられない、異年齢保育や合同保育での指導の仕方が分からない、グレーゾーンの子と他の子への対応が難しいなどの悩みもあげられました。みんなで話すうちに、だれもが悩みながら保育していることがわかり、自分だけではないというほっとした様子が見られました。

○特別支援保育

参加者は13名でした。小グループに分かれて、子どもの抱えるしんどさ、大変さや楽しいこと、喜びを感じている場面などについて話し合いました。保育者の工夫、障害や発達への理解の仕方についても話し合われました。

その後、「ADHDの子どもへの対応」というテーマでディスカッションを行い、疑問や対応などの活発なやり取りがされました。子どもが一番大変な思いをしていること、少しずつでも発達・成長していることなど、子どもに対する見方や考え方に対する助言がありました。



○保護者支援

参加者は12名でした。「保護者支援で困っていること」をテーマに話し合いを進めました。

母親と話したいがうまく会話できない、親が忙しすぎてコミュニケーションをとる時間がもてないなど、保育者の抱えている問題がたくさん出されました。個々の保護者への対応よりも園としてどのように取り組むかが大切、支援組織をつくることも必要との助言がありました。

保育者は自分がやっている努力を認めることが必要であり、認めてくれる職場環境があることが大事という助言もありました。



○小学校・学童などの関係者

参加者は2名でした。小学校や特別支援学校での勤務の様子を生き生きとした表情で話されました。悩んでいることはないが研究授業や指導案の作成などで毎日がとても忙しいなどと、日頃思っていることをよい雰囲気話し合うことができました。

絵本から広がる世界

田代康子

1. 絵本の醍醐味は「読み聞かせ」でこそ

「読み聞かせ」という言葉は、「聞かせる」という使役動詞には強制的に聞かせるというニュアンスが含まれるので、子どもと絵本の間を考えるとちょっと抵抗があります。同じように感じて「読みあい」とか「読み語り」という方もいらっしゃると思いますが、あえてこうした表現をするならば私は「読み遊び」がいいと考えています。が、ここでは、おとなが子どもに絵本を読むという形態を表現する保育用語として定着している「読み聞かせ」という言葉でお話します。

1) 絵本の三つの要素

ストーリーのある絵本は三つの要素で構成されています。「絵」と「文」、これが二つの要素です。そしてもうひとつの要素は「ページをめくること」です。見開きのページの絵と文が補い合い重なり合って読者に情報を与え、読者はある心の状態になります。そして次のページがめくられるまでのほんのわずかな間、ここで読者の心は大きく動きます。初めての絵本を読んでもらっているとき、「ページをめくる」ということは未知の世界に出会うことなのです。それまでの展開からこうなるはずという予測ができたとしても、果たしてその通りになるかは作家次第、ページがめくられないことにはわかりません。「ページをめくること」は、読者にとっては実に大きな意味をもっているのです。

絵と文とページをめくる、これが絵本の三つの要素です。



「絵本から広がる世界」の魅力をお話される



魅了されて聴き入る

2) 子どもの読み方は「読み聞かせ」

おとなに絵本を読んでもらうとき、子どもは目で字を読む必要がありません。耳で文を聴くのです。その間中、子どもの目は絵を見ているのです。そしてページをめくるのは、読み手のおとなしだいなのです。

たとえば、『すいかのたね』（さとうわきこ作、福音館書店）。表紙から内表紙、第一場面まで実際に子どもと同じように読み聞かせを試みましょう。

表紙、内表紙と続くと、思わず次どうなるかなと思ってしまったはずです。そして、本文に入り、ページがめくられ画面全体があらわれた瞬間、まず二ページ見開きの絵全体が目に入ります。その後で、「おひさまピカピカ光って嬉しくなっちゃう日にね……」の文を聴くと、目が「おひさまはどこだ」と探してしまっただけです。読み聞かせでは、絵本の三つの要素が頭の中で一体になって楽しむのです。

一方、自分で絵本を読むおとなはといえば、文が中心です。まず目で文を読み、読み終わるとすぐにページをめくり、めくる間に目でチラッと絵を見るという読み方をします。目だけで字と絵に対処するので、文が先行し、絵は挿絵でしかありません。文が短いために頻りにページをめくらざるをえず、ページをめくるのは面倒にさえなります。大人の読み方は、絵本の三つの要素がバラバラに切り離され、文にのみ重みがかかった読み方なのです。おとなにとって、絵本は文によってストーリーがわかればそれで十分なのです。

3) 絵本の醍醐味は「読み聞かせ」でこそ

文を聴きながら絵を楽しめるのが「読み聞かせ」の醍醐味です。絵と文とページをめくるがひとつになって絵本の魅力を満喫できるのは「読み聞かせ」でこそなのです。絵本を読んでもらう子どもの楽しみ方は、おとなの読み方とはまったく異なっています。このことを肝に銘じると、子どもに絵本を読むのが断然おもしろくなります。

絵本を読みながら、子どもの目の動きを見てください。絵のどこを見ているかがわかります。表情や言葉に注目すると、心の動きが感じられます。すると、ページをめくるタイミングを見計らうようになり、声音や読み方も変えてみたくなります。そんな読み手の好奇心を子どもはすぐに感じて、きっと何かを言ったりしたりするはず。子どもが楽しんでいる時間を共有できる、子どもに絵本を読むおとなの醍醐味はここに 있습니다。

というわけで、読んでもらってこそ絵本の楽しみですから、字が読めるようになって読み聞かせをしてほしいのです。小学校の中学年くらいまで、幼年文学、児童文学を読み聞かせてほしいと思います。そして、おとなになっても読み聞かせを楽しむ必要があります。保育中の他の保育者の読み聞かせを、子どもを膝にのせて一緒に楽しむと、読み聞かせの子ども楽しさをいっそう知ることができるはず。です。

2. 自分自身の心の動きが楽しい

我が家の『おだんごばん』（ロシア民話、脇田和絵、瀬田貞二訳、福音館書店）は、ページの中央斜めにテープの補修跡が無残に残っています。

このページが破られたのは、娘が三歳になったころです。一歳ころから絵を見ておしゃべりして、やがて文のリズムにあわせて頭を動かすのが楽しみで、いつの間にか全文を聞いてと楽しみ方が変わり、読み終わると「おだんごばん、食べられちゃったね。かわいそうね」とよく言っていました。

そんなある日、おだんごばんがキツネに出会って《ぼくは てんかの おだんごばん》と歌っている文章を読んでいる最中に、娘は突然手を伸ばし激しい勢いでページをめくりました。「まだよ」と私がページを押さえたために、じつに見事に二ページが重なったまま破れてしまったのです。

その後、チュコフスキー『2歳から5歳まで』（理論社）の本で、「おだんごばん」の話をきいた子どもが、娘と同じ箇所で、「もういい！ もういい！」と泣きわめいたという記録を読み、アツと思いました。娘がめくったのは、「おだんごばんが食べられる！そんなのイヤだ！」の意思表示だったと思い至ったのです。

それまでの「かわいそうね」は、おだんごばんという絵本の登場人物の出来事で、自分とは関係ない遠くの他人事だったのでしょう。でもその時、「その先は聞けない。ここで終わりにしたい！」と思うほど切迫した感情に襲われ、その結果一気にめくらざるをえなかったのでしょうか。そんな心の動きの証拠がこの補修されたページです。

安曇幸子さんの実践記録に、二歳児クラスに『だーれもいない だーれもいない』（片山健作、福音館書店）を読んだときのようすが次のように書かれています。

ジーッと聞き入り、コッコさんがお母さんに会えるとホッとした顔。

そして、「ふゆちゃんも、だれもいなかったんだよ」「もえちゃんも、ふゆちゃんも、みーんないなかったの」「お父さんも、お母さんも、いなかったんだよ」「寛ちゃんも、寂しかったの」「ひめちゃんも、みんなみーんないなくて、寂しくなったの」「お母さんいなかったの。ゆうひ泣いちゃうの」。

どの子ども、コッコさんの気持ちに共感している（！）という目をしていました。

子どもたちは、目が醒めたら誰もいなかったという登場人物コッコさんと同じような気持ちを感じているのです。自分の体験を語りながら、そのときの自分の気持ちを「寂しかった」「寂しくなった」と表現しています。絵本にはまったく書かれていない言葉です。ありありと自分が感じた感情と「寂しい」という言葉を結びつけています。自分のなかに生じたあの感情を、「寂しい」という言葉でつかまえるきっかけになっています。

子どもがストーリーのある絵本の読み聞かせを楽しむときの心理は、大人がストーリー展開のある本や漫画を読むときの楽しさと共通しています。大人がこうした本を楽しむとき、登場人物の行動や心理描写や心理表現をもとに、読者や観客として自分自身の中にある感情が生まれ、その感情を楽しみながら同時にその感情に引きずられるようにして先を知りたくなくなって楽しめます。

子どもがストーリーのある絵本を楽しむときの心理も同じなのです。ハラハラドキドキしたり、怖かったり、シミジミしたり、アハハハと笑ったり、疑問に思ったりとその時々心の動きを楽しみ、同時に先を知りたくてたまらなくなり読み終わるのです。もちろん子どもの絵本は、大人が楽しむ本よりは登場人物の関係も事件も単純ですが、読んでいる最中に心が動くという点ではまったく同じです。読み聞かせしてもらっている間の心の動きが楽しいのです。絵本を読むときいちいち「この絵本では何が言いたいのか」と問題にする人がいますが、大人が推理小説を読むときの楽しみを考えると、こんな問題のたて方は一面的です。読んでいる過程そのものが楽しい、そんな本のとらえかたをすると子どもが絵本を読む楽しさに近づけるのではないかと考えています。

1) 子どもに人気の絵本リスト —おもしろがっている子どもの心の動きをもとに—

読んでいる最中のこうした心の動きは、絵本によって違います。試みに子どもに人気の絵本を心の動きによって以下の8つに分類して絵本リストを作ってみました。一つの手がかりとして参考にしてください。

- ・まねっこしたり、読み手とあそぶのがおもしろい
- ・発見するのが楽しい
- ・コワイコワイがおもしろい
- ・ハラハラドキドキがおもしろい
- ・ことばがおもしろい
- ・シミジミするからおもしろい
- ・アリッコナイからおもしろい
- ・「もしかしたら・・・、ここにもいるかもしれない」とその気になるからおもしろい

2) コワイコワイがおもしろい絵本の場合

1歳児クラスで『ねないこだれだ』（せなけいこ作・絵、福音館書店）を読んでいるときの映像を見ていただきましたが、オバケがでてくると、手にしていたBブロックの棒や、足で、オバケを叩いていました。「こわいんでしょう」と私が言うと私にもたれかかりながらさらにオバケを叩き、そして「オバケこわい」と言っています。たしかにコワイのです、だけどそれは泣くようなのっぴきならないほどの怖さではなく、コワイコワイと言いながらもその怖さを楽しんでいるかのような状態です。それが、この子どもたちがこの絵本を楽しんでいるときの心の動きだと考えます。

3) 同じ絵本でも、年齢によって異なる心の動きをする

リストにあげた絵本は仮説です。同じ絵本でも、年齢によって、おもしろがる心の動きは違います。たとえば、『かいじゅうたちのいるところ』（モーリス・センダック作、神宮輝夫訳、富山房）です。1歳児クラスの冬にこの絵本を読み聞かせると、「かいじゅう」という言葉や怪獣の絵を見て、「コワイ」「コワイ」と言う子どもがいるし、それを聞いて首をすくめながらも「コワクナイ！」と見栄

を張ってしまう子どももいます。こんなことを言いながら読み進み、マックスが怪獣島から帰る場面になったとき、突然絵本の前に出てきて怪獣たちのひとつを指さし、「これなおちゃん」「けいちゃん、これ！」と自分の名前を言い立てはじめたのです。コワイと言っても、さして怖くない、コワイコワイと言いつつ楽しいという「コワイコワイが面白い」心の動きをしているといえます。そこで、リストではこちらに分類してあります。

けれども、5歳児クラスの秋に子どもたちに読んだときはまったく違う心の動きをしています。マックスが怪獣島に行ったのは夢だったのか、それとも本当だったのかと大論争になったのです。

「あれ夢だったんだよ」「ちがうよ、本当だよ、本当だよ」「夢じゃないよ」「あれ、夢だもん」「夢じゃないもん」「また戻ってきたんだもん」「だって、朝だったもん」「夢じゃない」「夕ごはんだから。朝ごはんじゃない。」「だから夢かも・・・」と、子どもたちは夢派と本当派に分かれ、それぞれの判断の根拠をもちだしては自説を主張し簡単に引き下がろうとはしないのです。

ところが彼らの自説の根拠としてあげる理由は、どちらの説の根拠にもなりうるもので決め手がありません。私自身はマックスがうたた寝をして夢を見ていたのだと考えていましたが、それを言ってしまうと取捨するのもおかしいし、「どっちなのだろうね、不思議ねえ」と言おうとしました。

そのとき、「絵本貸して」と絵本を手にしてパラパラめくっていた岬ちゃんが、「夢じゃないよ。月を見てごらんよ。初めは、ほら、三日月だったのに、最後はまんまるになっている。夢じゃない。」と、初めの寝室の窓の月と最後の寝室の窓の月とを示したのです。確かに、それまでの三日月が絵本の途中で満月に変わっているのです。この「動かぬ証拠」には、「本当」派の子どもも、「夢」派の子どもも私も、「ほんとだ・・・」としばし声もありませんでした。

5歳児クラスのこの子どもたちは、「夢かホントか」ということを考えることをおもしろがっているのです。この年齢では、『『もしかしたら・・・、ここにもいるかもしれない』とその気になるからおもしろい』に分類する方が適当です。目の前の子どもたちの心の動きを感じて、その心の動きをふくらませる読み聞かせを生み出してください。絵本リストの心の動きはあくまで仮説です。新しい実践を教えてください。

子どもは大好きなおとなに絵本を読んでもらって、心が動くのが楽しいのです。読み聞かせるおとなの楽しみは、こうした子どもの心の動きをビビッドに感じられることです。絵本を読み聞かせていて楽しいのは、子どもたちのその瞬間の気持ちがわかるときなのです。ですから子どもたちが目をキラキラさせたり、身を乗り出したり、こわそうな表情をしたり、思わず叫んだり、興奮してしゃべってしまうなどということは、子どもたちの気持ちがわかるまさにそのときなのです。読み手冥利につきると思ってしまう。

3. ハラハラドキドキがおもしろい

ーグリム童話『おおかみと七ひきのこやぎ』（フェリクス・ホフマン絵、瀬田貞二訳、福音館書店）
を楽しむ3歳児クラス8人の読み聞かせ記録からー

1) 「オオカミ！」「開けちゃダメ！」叫ぶ心の動き

今聴いていただいたように、この子どもたちの場合、足を白くしたオオカミが三度目に子ヤギの家
にやってきた第7場面で、ひとりの子どもが「オオカミ」と叫びました。この第7場面と、次の一転
して子ヤギの家側の絵で窓の白い足を見せ、「たしかにお母さんだと思い込みさっと戸をあけました。
ところが、入ってきたのは」という第8場面は、多くの読み聞かせ記録を集めてみると共通して「オ
オカミ」とか「開けちゃダメ」と子どもが叫ぶのです。

なぜ、子どもはこう叫ぶのでしょうか？「子ヤギになりきっているから」とよく言うのですが、も
し子どもたちが子ヤギになりきっていたら、ここでは「ワイ、お母さんが帰ってきたんだ」と言う
はずです。なのに、そう言っていない。なぜでしょうか？

それは、子どもたちが「読者」という独特の立場にいるからなのです。

このフェリクス・ホフマンの絵本では、母ヤギが出かけてから以降は、ずうっと狼の行動だけ、つ
まり狼の側の絵だけが4場面連続して描かれています。しかも、狼がヤギの家に来て「あけておくれ」
と言う1回目も2回目も3回目も、同じ位置に家の扉が描かれ、狼の表情や姿勢だけが回を増すごと
に変化しているのです（この狼をよく見ると、彼の気持ちの変化がよくわかって感心してしまいます、
見てください）。ところが、声も足もきれいにした狼が3回目にやってきた次のページの絵は、一転
して子ヤギの側からの絵になっているのです。

読者である子どもたちは、狼のたくらみをすべて知らされ、狼がだまそうと来たことをよく知って
いるのです。一方、物語の登場人物の子ヤギはずっと家の中にいるのですから、3回目に狼がやって
きたとき、狼がすでにパン屋や粉屋に行って手を白くしたことなど知りません。読者の自分は知って
いるのに、子ヤギは知らない！そこで、子どもたちは自分の知っていることを子ヤギに教えてあげ
ざるをえなくなるのです。知っている読者と知らない子ヤギの対比が鮮やかに描かれているからこそ、
思わず出ってしまったのです。

サスペンス映画の巨匠と言われたヒッチコックは、「エモーションこそサスペンスの基本的な要素
だ」、「観客の精神状態のコントロールがサスペンスづくりの基盤だった」と言い、観客に情報を与え
れば与えるほどそれだけサスペンスが増すのだと考えてサスペンス映画を作りました。福音館の絵本
は、まさにヒッチコックのサスペンス映画と同じ構成をしているのです。だからこそ、この絵本は子
どもたちが叫ぶほどにハラハラしてしまうのです。

2) ハラハラドキドキしにくい絵本が多い

読者の立場に立たせるからこそハラハラドキドキの心の動きのおもしろさが「おおかみと七ひき
のこやぎ」の絵本の鍵なのに、こうした読者の立場を無視した構成の「おおかみと七ひきのこやぎ」

の絵本がとて多いのです。

＜絵と文とページの関係＞

たくさんの出版社から多くの同名の絵本が出版されていますが、登場人物と読者の対比が鮮明ではないものが多いのです。読者に狼の絵だけを続けて示さず、扉を境に狼と子ヤギが向き合っていたり、あるいは狼側の絵と子ヤギ側の絵が交互に描かれていたりします。絵が文章の挿絵になってしまい、子どもたちがハラハラするためのページの構成になっていないのです。

ひどいものになると、ページをめくると狼が飛び込んでいる絵が描かれているのに、文は「あけておくれ、お母さんよ」というものもあり、ハラハラする楽しみなど味わう余地がないものがあります。「狼の言ったことはみんな本当だと思って、戸を開けました」でサッとページをめくると、狼の飛び込む絵が目に入っているのに、「ところがどうでしょう、入って来たのは狼でした」などと間延びした文章があって、子どもの緊張がプツンと切れるのを実感させられるものもあります。

＜絵の問題＞

ある絵本では、狼が白い手を出した窓に狼の頭と目が描かれています。この絵本を読むと、子どもに「狼だってわかるのに、なぜドアをあけるの？」と質問されます。「子ヤギは小さいから窓の下の方にいて……」と視差を持ち出して説明しなければなりません。子どもに不要な質問をさせる絵は困ります。

「狼が入ったら最後、お前たちをまるごと食べられちゃうからね」と注意したにもかかわらず、家に戻って家の中が大変な状態になっているのに、「あら、みんなどこに行ったの？」と言った程度の軽い驚き方しかしていない母ヤギのようすに拍子抜けする絵が描かれた絵本もあります。

＜文の問題＞

丸谷オ一氏は「絵本の文体は子どもの人生で最初に出会う文体」と言っています。絵本によっては、「やさしい」とか「安心して」等で安易に状況を表現する文章が多様されています。無駄のない文章かどうか吟味する必要があります。

＜繰り返し読む＞

ハラハラドキドキが真髓の絵本は、一度読んだら結末がわかっているからもはやハラハラしないし、何度も読まないかというところではありません。先の福音館書店の絵本のように子どもの心の動きを配慮してハラハラ状態がページごとにつのっていく絵本では、くり返し読んでもらいたがります。先を知っているから余裕たっぷりに安心して、あたかも「あのハラハラよ、もう一度」とでもいうかのように、この場面の聴き方を変えて楽しんでいます。たとえば、飛び込む直前に実にタイミングよく「狼！」「大変だ！」などとわざわざ言ったり、飛び込んだ途端「キャーッ、キャーッ」と逃げ惑うさまを演じるかのようなこともあります。読み手を見ながら、ニヤリとしながら、こわくないけどねという感じで、でもやはりこの場面の緊張感を違う形で楽しんでいるようなのです。それだけに、ハラハラドキドキする絵本では、絵と文とページの関係や絵を十分に吟味して慎重に選んでほしいと思います。

4. 絵本からはじまる仲間づくり

1) 仲間と心の動きを共有する楽しさ

『もこ もこもこ』を2歳児クラスに読んだ時の録音を聞いてください。

文を聞いて、絵を見て、「〇〇ミタイ」と見たてる発見が楽しいのです。「次どうなるかなあ？」が楽しいのです。発見して、その画面の雰囲気を感じて、これまでの展開とつなげて、知っている限りの言葉で表現して、子どもひとりひとりの頭の中はフル回転しているようです。

このフル回転の具合が一緒にいる仲間と重なるのもおもしろいし、自由に広がるのもおもしろいのです。こんな心の動きを、みんなで創りだしているといえます。みんなで読む楽しさは、仲間の言葉を聴き、そこから発見し、そして自分も言いたくなるわけです。まさに、「仲間の発見が、あたかも自分の発見であるかのようになるとき」と言えると思います。

複数の子どもに絵本を読むときに大切なのは、絵を楽しむ時間をたっぷりとり、ページをめくるときのワクワクを楽しむためにページのめくり方に注意し、読み手が集団全体の気分の状態を敏感に察知することです。子どもはゆっくりと感じ、ゆっくりとそれを表します。どの子も感じ表わせるようにしつつ、全体の気分がもっと言いたいのか、もう十分なのか、それを瞬時に判断できるとき、読み手も子どもも絵本を満喫できるのです。

2) 5歳児クラスの岩附啓子さんの実践 — 『エルマーになったこどもたち』 ひとなる書房刊より—

5歳児クラスの秋の遠足を前にして、ただの遠足ではなく探検を遊ぼうと考えた岩附さんは、2日前から意識的に『エルマーのぼうけん』（ガネット作、渡辺茂男訳、福音館書店）を読み聞かせ、前日に読み終わります。物語の最後は、「けれども、エルマーとりゅうは、だれがなんといおうと、どうぶつ島なんかに、もどるものかとおもいました」です。けれども岩附さんはその後に、「その後のエルマーとりゅうのゆくえはだれも知りません。どこへ行ったのでしょうか。みんなのそばにひょっとするとエルマーとりゅうは隠れているかもしれませんね」と付け加えて「読んだ」のです。

予想どおり子どもたちの中からざわめきが起こり、「りゅうはどこへ行ったんやろ」「うん知りたいな」と言いだしました。子どもたちのこの反応に、「昔、おじいさんが片田の山へ出かけていったとき、洞穴の中でりゅうのしっぽをチラッと見たことあるって聞いたことあるよ」と岩附さんは言ったのです。

「へえーあす遠足に行く片田の貯水池にりゅうがおるの？」

「ぼくたちはほんとうに探検に行くの？」

「そんならエルマーといっしょやな、ぼくたちも探検に行くんや」

「スゴイゾ！」

岩附さんの計画どおり、子どもたちは物語と遠足をひとつに結びつけました。こうして子どもたちは片田の貯水池にいるりゅうを助けるために、邪魔する動物の対策を考え備えし、エルマーのように遠足に行くことになったのです。

遠足で、動物の気配を感じて緊張し楽しく探検をしたのですが、帰る時間も迫り、りゅうを探しにきた子どもたちをそのまま帰してよいものかと焦った岩附さんは、迷ったあげくひとつの案を思いつき実行します。山を通り抜けるのがこわくていったん探検隊が逃げ帰ってきたその機会をねらって、「あっ！ りゅうのしっぽが見えた！」と叫んだのです。

「どこに」といっせいに後をふり向き、「なんにも見えへん」「どっちの方に逃げていったんやろ」「女の子がキャアキャア騒ぐもんで、りゅうがびっくりして逃げて行ってしもたんや」と怒り出す子もいます。はじめは見るができなくて残念がっていた子どもたちでしたが、しだいに「ガサガサという音が聞こえた」「ぼくはチラッとしっぽが見えたような気がする」と微妙に変化しはじめるのです。帰りのバスでは、「りゅうが見られてよかったなあ」の声もあれば、こうもり山に入る手前で道が分かれていたのを指して「こんどはあっちの道に行ったらりゅうの頭が見えるかもしれんな」の声もありました。りゅうを見たという子は四人でしたが、片田の貯水池にはやはりりゅうが住んでいるのだという思いを強めて帰ってきたのです。

翌日から本を見ながらエルマーごっこをはじめ、それを生活発表会で劇にしようと取り組みます。探検しているような気分で劇づくりをしている子どもたちですが、みかん島やどうぶつ島が実在しているとしたらより楽しみが増すのではないかと考えた岩附さんは、「みかん島やどうぶつ島はどこにあると思う？」と問いかけます。翌日、子どもたちが持ってきた模造紙大の大きな世界地図を拡げて島を探しますが、見つかりません。そこで、岩附さんは前日見つけたぴょんぴょこ岩そっくりの写真を示すと、この「証拠」に子どもたちの目は輝き、説明文の「アマゾン川」を手がかりに世界地図でブラジルにあることを発見するのです。

より役らしく演じるにはどうするかを話し合っているとき、「エルマーはどうして動物のことばがわかるの」、「エルマーは家の人にもだれにも気づかれずにアマゾンのどうぶつ島に行ったのに何でこの本を書いた人は知っているの」と疑問が噴出。議論の末、一応納得できました。

発表会が終わり、続編を読み進めると、子どもたちの疑問はまた復活しました。りゅうの住みかが「そらいろこうげん」と知って、片田の貯水池との関係が気になったのです。困った岩附さんが「貯水池のずっと奥にそらいろこうげんがあるんやと思うわ」と言うと、すぐに貯水池の写真を調べ本のそらいろこうげんの地図と似ていることを確認し、岩附説を認めます。

さらに、どうぶつ島から逃げてきたりゅうが一休みしていたところを自分たちは「見た」と考える子どもたちに、岩附さんは「おじいさんはずっと昔にりゅうをみたと言っていた」と矛盾を指摘します。子どもたちは自分たちの知識を総動員して論理を組み立て、逃げてきたとき子どもだったりゅうが大人になって貯水池に遊びに来たのだと理論づけます。

真実追究のあくなき挑戦は、図鑑をくまなく調べることへと進みます。恐竜とりゅうの関係が問題になり、「すごい種類のりゅうがいるけれど、エルマーのりゅうの種類はまだ世界中で発見されていないので図鑑にも載っていない」と考えます。「りゅうは2億年前の生き物だけど、十六匹だけがスカンクキャベツを食べていたから生き残ることができた」という子どもたちの説に、岩附さんが「スカンクキャベツってどんなキャベツなんやろうな、見たいなあ」と迫り、家族も巻き込んで調べ出し

ます。岩附さんも必死に植物図鑑を調べ、スカンクキャベツが日本にも生育していることをついに突き止めました。子どもたちの考えが証明されたのです。

さらに、シーラカンスは3億年前から今も生きていることを図鑑で発見し、2億年前のりゅうだつて生きているのは不思議ではないと論理的に考えます。世界地図でゴビ砂漠を発見し地図の位置からそらいろこうげんは中国説を考える子、カナリヤ島と似たカナリア諸島を発見しアマゾンからこんな遠くまで逃げたのはなぜかと考える子と、疑問はつきません。劇づくり後も続く子どもたちのりゅう実在の証拠探しは圧巻です。

保育の中に意識的に絵本や幼年文学を位置づけて取り組むと、5歳児はごっこ遊び、劇づくり、紙芝居づくりへと展開させられますし、こんな論理的思考をして自分たちの世界を広げていくことも可能なのです。

3) 2歳児クラス安曇幸子さんの実践 —いくつもの絵本がつながって広がる世界—

<『にゅーするするする』(長新太作・絵、福音館書店)>

東京豊島区立保育園二歳児担任の安曇幸子さんが、オバケ探しが大好きな子どもたちにこの絵本を読み聞かせました。この本を読んだ後、子どもたちは「こわいねー」と黙りこくっていたのですが、それでいてこの本が好きで、自分たちでまた開いては、『『にゅー』いたよ、こわいねー』と言いつつ合っているのです。その後も、この絵本はひっぱりだこで、ままごとかばんに入れて持ち歩くは、昼寝のときに抱いて布団に入るはという人気絵本になったのです。

こわいと言いつつこの絵本が大好きな子どもたちを見て、探検遊びとして広げたいと考えた安曇さんは、子どもたちと園庭に出たとき、一言「にゅー、いるかな?」と言ったのです。すると、「こわいよー」という子のなかで、「向こうにいるよ。やっつけよう」と強気な子も。『『にゅー』いたよ。フウーって言ったよ』『あっちにいた。ニューって言ってた』『エイ、エイ、オーッ! ヨーシ! アンパンチ!』と実に頼もしい子もいて、『『にゅー』がいた! 逃げろー!』で逃げ帰ったりの遊びをしたのです。

こんなに好きな『にゅー』を、いったい子どもたちはどんな風にイメージしているのかと考えた安曇さんは、『『にゅー』はどうなっているの?』と子どもたちに聞いてみました。「『にゅー』の髪の毛は?」「ないのー。口が大きいのー!」「目と鼻は?」「(目をつり上げて) こーんなの。(鼻を上に向けて) こーんなの」。そして色は「青!」「白!」と言うので、「水色」と決まり、口々に言う子どもたちのイメージを安曇さんが描き、ポスターにして部屋の壁に貼ります。一部の子もイメージする『にゅー』の姿を絵にして、そこまではっきりしたイメージをもっていない子どもたちも巻き込むようにして共通のイメージを作っていきます。

その後公園に出かけるのですが、道中で、『『にゅー』は何食べるかな?』と聞くと、「ブドウ、すっぱい」「みかん」「梅」と子どもたちが言い、とにかく『にゅー』はすっぱいものが好きということになります(これも帰ってから絵に描き込んでいきます)。

<絵本でオバケが増える>

こんな遊びをしているときに、『めっきらもっきら どおんどん』(長谷川摂子文、降矢なな絵、福

音館書店)を読みます。しっかかもっかか、もんもんびゃっこ、おたからまんちんはどうやら子どもたちは『にゅー』と同じオバケの仲間とみているようです。

『おばけが ぞろぞろ』(佐々木マキ作、福音館書店)も読みました。大好きでくり返し読んだので、登場する七人のオバケはすっかり覚えています。散歩の途中で空に飛行機が飛べば「あっ、ぞりんばちゃんだ。ぞりんばちゃん！」と大声で呼びかけて手を振ります。

絵本というのはその一冊の絵本が単独にあるのではなく、聞いている子どもたちの頭の中で何冊もの絵本が重なり関連づけられているのです。子どもたちが今夢中になっている遊びを広げようとするとき、この絵本選びが重要です。絵本の組み合わせが遊びの展開に大きく影響するはずです。

子どもたちは三冊の絵本で「いちご組のオバケ」を増やし、その結果、探検ごっこで探すオバケもその時の気分しだいにより取り見取り。そしてついに「創作オバケ」も登場しました。

九月に入って、一人の子が「ドロンガがいたの、あそこの木のところ」と言い出し、それに対して「わかった！ すぐ行く！」「よし！ 今行きます！」の返事。(なぜか、探検ごっこの時は勇ましい言い方になるのです。かっこよさにひかれるのかな?)そのうち、一人が倒れた真似をすると、「あっ！

足に血が出ているよ」「よし！ ドロンガ！ しょろぶしろ！」(勝負しろと言いたかったようです)と、ドロンガ登場です。

<ついにオバケが十五人！>

『オバケがぞろぞろ』のナンデモアリの名前や語感、語彙を増やしたい二歳児クラス児にぴったりなのでしょう。発見したものに独特の名前をつけてオバケの仲間を増やします。

公園からの帰り道、道端の家の柵に散髪用マネキンの頭が置いてあったので、これは子どもたちがブーバー君と名付けました。その後、その家でもう一体のマネキン人形が見つかり、ブーバー君の子どもということになりました。犬のウンチは「黒オヤジのウンチだ」という話になり、オバケは15人にもなったのです。

保育者が子どもたちのイメージを育てたり引き出ししながら、クラスのオリジナルのオバケの世界がふくらんでいきます。

<素話も加わって>

安曇さんは、このオバケたちを登場させた素話を子どもの遊びをもとに創作して昼寝前に語りました。たとえば、『にゅー』という国がありました。そこには、『にゅー』の王様とたくさんのオバケたちが住んでいました。ある日、ブーバー君という人間の子どもが、おばけになってやってきました……』という具合です。

この素話によって、「クラスのオバケの世界」を子どもたちのなかにしっかりと定着させていきます。さらに、おやつ時間にミカンを配るとき、「ここはオバケのレストランです。このミカンは『にゅー』からもらったミカンです」と安曇さんが言うなど、子どもたちがイメージしている内容にそって、日常生活のときどきに「クラスのオバケの世界」を話題にしていくのです。

冬になって、昼寝前の素話に「うしかたとやまんば」「さんまいのおふだ」を加えました。するとさっそく、公園でやまんば探しの遊びが始り、突然優しいやまんばだという「山ばあちゃん」を子どもが

登場させました。

フェイスペインティングでオバケごっこをしたり、こうした遊びをすべてつなげたお話を作って生活発表会で遊びました。

一冊の絵本から始まった「にゅー」探検ごっこでしたが、子どものイメージがクラス全体に定着するように意識的につなげていけば、子どもたちの想像の世界は絵本を超えて広がっていくのです。今を楽しみながら、子どもの想像を飛躍させる手立てをつねに考えていきたいものです。1年間をつなげるのは並大抵のことではありませんが、保育者が意識してつなげようとするればこのような展開も可能だということです。

4) 絵本を共通のイメージの基点として「クラスの文化」「園の文化」をつくる

子どもたちに絵本の読み聞かせをしているとおもしろいのは、聞いている子どもたちが生み出す雰囲気はひとつになり、しかもそれがストーリーの展開にしたがって変わっていくということです。シミジミした展開では全体がシーンとするし、おかしいときは爆笑するし、アレッ、変だなといったときには全体の雰囲気が「ンッ？」という感じになるし、ハラハラドキドキの緊張がプツンと切れたときには子どもたちは口々にしゃべりはじめ、読み終わった後に満足の吐息だけがして誰も声を発しないなどということもあります。一緒に絵本を楽しんでいる仲間が生み出すこうした雰囲気のなかにいる、これも子どもには絵本の楽しみのひとつなのです。

読み聞かせを子どもたちが自由に楽しんでいるときにはこの雰囲気が生き生きと創られていきます。たとえば、はじめ「クックッ」と僅かにおこる笑い声は、ほとんどの子どもたちの気持ちにピッタリしていれば誰も文句をいいません。それどころか同じように笑いたくなる場面になると、笑い声はもっと大きく、もっと多くの子どもたちからあがります。こうなると、「おもしろいねえ」なんてハッキリ言い出す子どももできます。それでも誰も「ウルサイ」なんて言いません。

絵本作家はこんな子どもたちの気持ちを予期しているのでしょうか、どんどん子どもたちを楽しい気分させて、ついに全員で大爆笑となることもあります。子どもたちのことですからこんなときの興奮は並大抵ではありません。「すごくおかしい」とわざわざ椅子からズリッと落ちて気持ちを表現する子、ゲラゲラゲラゲラ笑いが止まらない子、絵本に駆け寄って間近で見ようとする子、「おもしろいねえ」を連発する子、「あのさあ、あのさあ」としゃべりたくてたまらない子などなど、それはまあ賑やかなものです。

こんなとき、たとえ「ウルサイ！」なんて言う子がいたとしても、みんなの気持ちとはズレているので誰も「アッ、いけない」とは思いません。ひとりひとり表し方は違うのですが、みんな何らかの形で自分の気持ちを表現したくてしょうがないのです。仲間と読み手とで今の気持ちを共有したいのです。この興奮した雰囲気はひとしきり続きます。でも、ひとしきりなのです。大爆笑の余韻を堪能しきると、タイミングを見計らった大人が再び文を読み出すと、笑い顔やワイワイを残したままではあってもまた絵本に耳や目を集中させ、しだいに次の雰囲気を創り出していきます。

絵本を読み聞かせていて楽しいのは、子どもたちのその瞬間の気持ちがわかるときなのです。です

から子どもたちが目をキラキラさせたり、身を乗り出したり、こわそうな表情をしたり、思わず叫んだり、興奮してしゃべってしまうなどということは、子どもたちの気持ちがわかるまさにそのときなのです。読み手冥利につきると思ってしまうかもしれません。子どもたちも、ひとりの子どもが思わず発した言葉や吐息が自分の気持ちと同じときはちっともうるさがりません。むしろそれでいっそう絵本の世界に引き込まれるともいえます。

クラスのみんなで絵本の読み聞かせを楽しむとき、子どもたちは自分と同じ心の動きをする仲間を発見できます。絵本作家はその絵本を楽しむ子どもたちがきっとこんなふうにおもしろがるぞと想定して作っているからです。こわがっても、シミジミしても、アリッコナイと大笑いしても、クラスの他の子たちも同じように感じているのです。こんな気持ちになるのは自分だけじゃないんだと気づけるのです。自分の気持ちを素直に表現できない子どもが増えてきている現在、仲間と一緒に絵本を楽しんで、同じように心を動かせるというのは、ありのままの自分でいいんだよということを知るチャンスかもしれません。

同時に、仲間の発見やことばをしっかりと聞けるときでもあります。だって同じ思いなのですから、そうそう私もそう思うとか、僕はこうじゃないかと思うと言いたくなるからです。

というわけで、クラスみんなに絵本を読むというのは、みんながそのイメージを共通に持っている、つまり「クラスの文化」をつくっているということなのです。「クラスの文化」で子どもたちがつながるのです。その意味で、集団づくり、仲間づくりのチャンス、これから活動の基盤を作るときです。「ついでに読む」「つなぎで読む」ではもったいないと思います。「手はお膝、お口にチャック」といった緊張を強いては、自由な心の動きも仲間との関係も、おとなの楽しみも生まれません。リラックスして言いたいことは自由に言える雰囲気です。

絵本を読むのは勉強ではありません。おとなと一緒に楽しむときであり、心が動くことそのものを楽しむときであり、仲間と一緒に楽しむときです。読んでいるそのときを、そしてその後の無限に広がる世界を楽しみましょう。そのためにも、子どもの心の動きに敏感になり、子どもたちのイメージを察知して、仲間と共有する手立てを工夫する必要があります。絵本で仲間づくりをして、絵本から広がる子どもたちの世界を楽しんでください。

お話した内容は、『もっかい読んで！—絵本をおもしろがる子どもの心理—』ひとなる書房、『ちいさいなかま』2008年4月号～2012年3月号「連載 絵本から広がる世界」に詳しく述べています。ご参照ください。

「絵本から広がる世界」～ 田代康子氏の講演を聴いて

桜花学園大学保育学部 布施 佐代子

いつも子どもの身近にあり、大好きなおとなに読んでもらったり、自ら手に取って読んだり、子どもにとってとても親しみのある「絵本」……。家庭でも幼稚園や保育所でも、子どもが絵本の世界を楽しむ姿を目にすると、なぜかほっと心がなごみ笑顔になります。

絵本には、子どもの心をとりにするなにか不思議な力があるようです。子どもにかかわる私たちおとなも、かつては子どもであり、とくにお気に入りの絵本があったり、身近なおとなに読んでもらった温かい記憶が心の奥に残っていたりするものです。私事で恐縮ですが、私自身も幼い頃母の膝でいろいろな絵本を読んでもらって以来、絵本が大好きになり、おとなになった今でもよく手に取って楽しんでいます。

そんな魅力的な「絵本」に関する研究も、さまざまなものがありますが、絵本に接しているときの子どもの心の動きに注目し、保育所の子どもたちに自ら読み聞かせながら研究を進めておられる田代康子氏をお迎えして今回たっぷりお話をうかがうことができました。私も保育現場の保育者と関わりながら研究してきており、かつ乳幼児を中心とした発達心理学を専門とする立場なので、(どんなお話をされるのかな)と、とても楽しみにしておりました。講演会当日は、保育現場の先生方や卒業生、在校生の参加もあり、田代氏の楽しいお話に参加者一同聴き入りました。

まず最初にお話しされた「絵本の3つの要素とその関係」について。田代氏によると、「絵本の3つの要素は、絵・文・ページをめくるであり、子どもの絵本の読み方は、『目で絵を見る、耳で文を聴く、ページをめくるとき心が動く』というように、これら3つの要素が一体となっている」。それに対して、おとなの読み方は、『目で文を読む、ページをめくるときチラッと絵を見る』というように、文が中心の読み方になっているのです。

これについては、(なるほど!)と思いました。確かに子どもは絵をよく見えています。おとなも気づかない細かいところに気づいたり、絵からさまざまなことを空想したり思い思いに感じ取っているようです。でもここで、田代氏が言われるように「読んでもらってこそその絵本の楽しみ」というものがあるのですね。「子どもは大好きなおとなに絵本を読んでもらって、自分自身の心が動くのが楽しい」というところは、まさに(そうだろうなあ)と大いに共感できます。子どもは大好きなおとなに文を読んでもらいそれを耳で聴くことによってこそ、絵そのものを安心して自由にじっくり楽しむこともできるのですね。年長さんくらいになって字が読めるようになり、自分でポツポツと拾い読みをしながら絵本を読んでも、字を読むことに集中してしまい、絵やお話の展開を心ゆくまで楽しむ余裕がありません。たとえ自分で字が読めるようになっても、おとなに読んでもらうことが子どもにとっていかに大切で楽しいか、再確認できたように思いました。

「絵本を見ているときの子どもの心の動き」については、発達心理学を研究する立場の一人として、とても興味深いものがありました。たとえば、「同じ絵本でも年齢によって心の動きが異なる」ということを、モーリス・センダックの絵本『かいじゅうたちのいるところ』の「読み聞かせ」1歳児クラス冬と5歳児クラス秋の比較でお話されたところ、そして『おおかみと七匹のこやぎ』で、おおかみが飛び込む前の場面で「おおかみ!」「開けちゃダメ!」と叫ぶ3歳児たちのハラハラドキドキの動きを、「読者として登場人物の身を案じている」

と分析されているところなどです。

確かに保育中の子どもたちの観察でクラスに入らせていただくと、このようなそれぞれの年齢に応じた心の動きが感じられる場面はよく見かけます。心の動きは目には見えないけれど、よく見ると目や顔の表情や動作、ことばの断片などから感じ取ることが可能です。田代氏のお話のなかで見せていただいたDVDの子どもたちの反応を見ても、とてもおもしろく（保育研究のヒントがいっぱいありそうだなあ）と感じました。実際の保育の場で、こうしたイキイキとした子どもの心の動きとそれを誘い出す絵本の特徴や要素、読み方などに注目し、その関係を明らかにしていくことは、保育実践者にとっても大変有益であり、保育現場に根ざした研究を推し進める力にもなると思いました。

最後にお話された「絵本から始まる仲間づくり」という視点ですが、こういう視点は保育上とても大切な視点だと思います。「おとなから絵本を読んでもらう」という「おとなと子どもの関係」からスタートし、「みんなで読む楽しさ」「仲間の心の動きを共有する楽しさ」を味わう「子どもと子どもの関係」（仲間関係）へと広げていくことは、単なる「仲間づくり」「集団づくり」だけでなく、仲間のことばを聴いて自分の心の動きに気づいたり、自分と同じ心の動きをする仲間を発見することを通して、自分の心の動きを再発見したりすることになります。このことは自我の発達から見れば、「仲間との関わりのなかで自分をみつめ受け入れ、仲間を認め受け入れる」ことにつながるのではないのでしょうか。すなわち、今の子どもたちに欠けているとよく指摘される「自己信頼感」や「自己肯定感」の確かな形成にもつながる大切なことではないかと思います。

限られた時間のなかで、「絵本から始まる仲間づくり」の部分は（もう少しお話聴きたいな）と思うところで残念ながら時間切れになってしまいましたが、ぜひ研究を深めてどこかでまた発表していただけたら・・・と、楽しみにしています。

当日は、田代氏自ら作成された「子どもに人気の絵本・物語 —おもしろがっている子どもの心の動きをもとに—」を貴重な資料として参加者全員いただきました。「こんな分類も可能かなという試案です」とのことなので、参加者各自それぞれの立場で子どもたちと関わりながら、この資料をもとに自分なりの絵本リストに仕上げていけたらと思います。

講演会前に痛めたとおっしゃっていた右手、当日もスカーフでおしゃれにカバーされていましたが、その後良くなりましたでしょうか?・・・お大事になさってくださいね。

子どもの姿がイキイキと伝わる楽しいお話、本当にありがとうございました。

〔研究報告〕 スウェーデンの環境教育、 「森のムッレ教室」を実践して

保育学部 嶋守さやか

同4年生 青木佐和・伊藤絵里奈・八反彩織

はじめに

はじめは一冊の本だった。岡部翠『幼児のための環境教育 スウェーデンからの贈りもの「森のムッレ教室」』である⁽¹⁾。スウェーデンの人口の約1/4が幼児期に体験する幼児のための環境教育の場が、その「森のムッレ教室」である。これを本学の保育学部でぜひ行いたい。そう考えるだけでワクワクした。森で笑う学生や子どもたちを想うと、岡崎京子『未完作品集 森』の冒頭の一節が筆者の頭に浮かんだ。「このエピソードで何が言いたいのかとゆうとよくわからない。ただとても小さなものがとても大きなものでありうることだとか。あるいはぼくらはいともかんたんにまよいこんでしまう。いろいろなものごとに対して」⁽²⁾。

「とても小さなものがとても大きなものでありうる」。日々の雑事に埋もれて「まよいこむ」たびに、森のムッレ教室について紹介する岡部の本を読み返した。そして2013年4月、筆者が保育学部ではじめて受け持ち、無我夢中で指導したゼミ生たち10名が保育士になる。青木佐和、伊藤絵里奈、八反彩織、このゼミ生3名が卒業研究テーマとしてムッレ教室を選び、筆者と一緒に森へと「まよいこんで」くれた。念願の森のムッレ教室が開かれる。

本稿では森のムッレ教室の概要を示し、2012年度に筆者がゼミ生とともに実践した森のムッレ教室について報告したい。この報告が森のムッレ教室実践でお世話になった方々へのお礼のご報告と、スウェーデンで行われている幼児環境教育プログラムの紹介となればとても幸いである。

1 森のムッレ教室とは

森のムッレ教室は、1956年にスウェーデンの野外生活推進協会が開発した5-6歳の子どもを対象とした自然教育プログラムである⁽³⁾。野外生活推進協会は1892年にスウェーデン最古の市民団体として設立され、現在も全国500支部、10万人の会員を擁し、週末には1万7000人のリーダーが自然のなかを案内している。「アクティブな野外生活を推進することによって国民の健康を促進し、生きる喜びを得ることに貢献する」ことがその活動の目標として掲げられている。ムッレは土壌を意味するスウェーデン語の「ムッレン」から名づけた森の妖精で、子どもたちを想像の世界に誘いながら自然の大切さを教える。ムッレ教室の創始者は、ヨスタ・フロムとステイーナ・ヨハンソンである。

—1985年、「毎日ムッレ教室を行える保育園をつくりたい」と考えた保育士のシーブ・リンデは、スウェーデン初となる野外保育園として野外生活推進協会による野外保育園である「ムッレボーイ保

育園」を発足させた。スウェーデンには186園の野外保育園、フリースクールに位置づけられる私立の野外小学校14校がある。その頃、脳科学者により3－4歳児の脳の発達の著しさが発見され、野外生活推進協会では3－4歳児対象の「森のクニユータナ教室」が開発され、1－2歳児対象の「森のクノッペン教室」、小学校の低学年対象の「森のストローバレ教室」、高学年を対象とする「森のフリールフサレ教室」と子どもの発達段階別に体系化された指導プログラムが整備されていった⁽⁴⁾。

森のムッレ教室はスウェーデン全土に広まり、今日までにスウェーデン人4－5人に一人の子どもが参加したことになる200万人がその教育プログラムを受けた。また、ノルウェー、デンマーク、フィンランド（年間約1万6千人のスウェーデンの子どもたちが森のムッレ教室に参加するが、フィンランドでは年間約10万人の子どもたちが森のムッレ教室に参加する）、ラトビア、ドイツ、イギリス、ロシア、レバノン、日本、韓国などでも開催されている⁽⁵⁾。日本では1991年にスウェーデンより講師を招き、ふるさと市島未来塾主催により第1回森のムッレ教室リーダー養成講座が開催された。日本での森のムッレ教室開催は1992年にスウェーデン野外生活推進協会の指導と、ふるさと市島未来塾の支援を受け発足した日本野外生活推進協会（高見豊会長）により行われている。2009年には、森のムッレ教室の開催資格を持つリーダーの数は日本全国で約2000人となっている⁽⁶⁾。

2 2012年度、森のムッレ教室を実践したゼミ生たちによる研究報告

本節では、青木、伊藤、八反の卒業論文から2012年度に行った森のムッレ教室の研究報告を示したい。森のムッレ教室リーダー養成講座とゼミ生たちが実践した森のムッレ教室の概要である。

2-1 森のムッレ教室リーダー養成講座を受講して

「自然と保育」という研究テーマで卒業論文を制作しようと考えようになった頃、ゼミ担当の嶋守先生に紹介された岡本理子の文章から、森のムッレ教室というものを知った。そこには、「森のムッレ教室では森での遊びを通じて、植物や動物のこと、さらにそれらが互いに関連しあいながら共生していることを学び、また活動を重ねていくことで自然のなかで楽しむ方法、そして自然に配慮することを同時に学ぶ⁽⁷⁾」と書かれていた。また、ゼミ生の中にも森のムッレ教室について学ぶ者がおり、NPO法人長良川自然学校主催の第143回森のムッレ教室リーダー養成講座を受講することに決めた。理論と実技の計20時間の講座を受講し、修了証書が授与されると日本野外生活推進協会のリーダーとして認定され、リーダーになると「森のムッレ教室」を開くことができる。環境教育を行うきっかけとして、また保育士になった時に自分の保育のなかに取り入れられるのではないだろうかと考えた。

1日目は、参加者が5・6人のグループに分かれて自己紹介をし、今回の目標を話し合った。私は自然の魅力を自分で感じ、子どもを惹きつける方法を学びたいと考えた。子どもに親しまれる自然の名前を使って、グループ名を決めた。私のグループは、森の中の小さな発見をしたいという願いから「でんでんむしチームー子どもに戻って自然の中のキラキラを見つけるー」に決めた。実際に外に出て自然観察を行い、身近な野山の草木・樹木・虫・動物の知識を得た。また花の名前を覚えるゲーム

や、参加者同士が仲良くなるためのゲームをした。ゲームには静と動の動きを含むゲームがあり、それが遊びの目的であることを学んだ。その他に五感を使う学びもあった。小鳥の鳴き声に耳を澄まし、何の小鳥が鳴いているのかではなく、なぜ小鳥が鳴いているのか考えた。そこから、一人ひとりの発想や思いを大切にすることを学んだ。布袋の中に入っているものを触り、同じ物を森の中から探すゲームも行った。葉々の手触りの違いを知り、同じものを森の中から探すことで触覚を研ぎ澄ました。

午後はピクチャーシアターを活用して、ムッレ誕生の物語や自然の循環やつながりの話を聞いた。自然観察で得た知識をクイズ形式で示したカードが森の木々にくくりつけられ、そのクイズに答えながら森を散策する「自然の道クイズ」を行い、最後にはムッレとの出会いもあった。理論では、森のムッレ教室では子どもの心身の発達に合わせた教育活動が展開されていること。また、子どもたちが自然を愛し大切にすることを育む教育を行っていることを学んだ。リーダーは、子どもと一緒に楽しみ、発見し、感動することが大切であり、子ども自身で発見できるように導く大切さも学んだ。

2日目では、1日目の学びをふまえてグループごとにムッレ教室の指導案を実際に考えた。私のグループは東屋で遊ぶゲームを考えた。森から様々な種類の葉を集めて大きい順に葉を並べ替える遊びや、葉の匂いを嗅いで、森の木々のどの葉だったかを当てるゲームをグループ発表の時にに行った。昼食は屋外食の実習として、ねじりパンを作った。グループで協力してパンの生地を午前中に作っておき、東屋の近くの田んぼでパンの生地を竹に巻きつけて焼き、美味しいシチューとともに味わった。

リーダー養成講座を受講して感じたのは、遊具がなくても外に出れば楽しむことができることである。学生である私たちや他の受講生が必死になって走り回る姿や、森の中で楽しむ姿を見、また体験して、何かを用意しなくても森の中ではそこにいっただけで楽しむことができた。遊びを通じてこそ、人と人の関わりが深くなると感じた。最も印象的だったことは、五感を使って植物に触れたことだった。幼い頃、つくしやいなごを食べたことがあり、今回の講座でカタバミの葉を食べ、花の蜜を吸った時に、その幼い頃を思い出した。幼い頃の体験は、何年経っても忘れないということを実感した。だからこそ子どもにも自然に触れて欲しいと思う。また、葉笛に挑戦した時、初めは全く鳴らなかったが、色々な葉で試していくうちに音が鳴るようになった。鳴った時はとても嬉しく、子どもの心に戻った気がした。日本の環境では簡単に山へ行くことができないため、他の方法で自然に関わることを考えたいと思っていた。しかし、森のムッレ教室リーダー養成講座を受けることで、身近にある自然と子どもが関わるように指導方法を工夫していけばいいことを学ぶことができた⁽⁸⁾。

2-2 事前打ち合わせと森のムッレ教室実施前の下見の概況

2012年9月28日金曜日、JR岐阜駅内ハートフルスクエアG小研修室2において午後6時半から8時まで長良川自然学校のスタッフ（にこちゃん、わっしー、よっしー、めぐっぺ）と森のムッレ教室について、打ち合わせを行った。にこちゃんを中心に、嶋守ゼミ生の青木佐和、八反彩織と私（伊藤絵里奈）の三人を主体とした森のムッレ教室の計画を考えた。

にこちゃんから10月21日と11月18日の2日間で、学生である私たちが主体となって森のムッレ教室を行うことが提案され、ゼミ生三人で承諾した。当日の実施時間は2時間程度であること。また、

森のムッレ教室の具体的な内容について、1日目の最初にスタッフ、子どもどうしが仲良くなるゲームを行い、ピクチャーシアターなどでムッレの説明をし、三つの約束を伝えてムッレの歌をうたう。子どもの集中力や状況に合わせて行うことが助言された。その後、打ち合わせに参加したスタッフ全員で相談して2日間の流れを考えた。その結果、1日目はパペットやピクチャーシアターなどを行い、子どもにムッレへの興味を持たせる。2日目はムッレが登場するという流れにした。

その後、全体の森のムッレ教室のテーマを決めた。開催日が10月と11月であるため、子どもに季節を感じてもらいたいということで、2日間の大きなテーマを「秋」にした。そこから、森のムッレ教室でどのような主活動を行うか具体的に考えることにした。「秋」というテーマから連想して、様々な大きさや色の変化を見られるため、葉っぱを使うことにした。スタッフのアドバイスを受けながら、10月は葉っぱを使った製作を行い、11月は葉っぱで遊ぶという流れに決めた。

その後、9月30日（日）の午前9時より森のムッレ教室を行う岐阜市少年自然の家にて下見を行った。下見はにこちゃん、わっしー、めぐっぺ、あかねちゃんのママとあかねちゃん、さとちゃん、そうげん君、りょうちゃん、ゆきちゃんといった子どもたちの5名、そしてゼミ担任の嶋守先生と私（八反彩織）の計11名で行った。森に入り、探検するルートを決めながら、森の中にはどのような葉っぱがあるのか、子どもたちと楽しめるものはないかを見つけることにした。

実際に森に入ると、ドングリやクリ、それにカキなどの秋の木の実がたくさん落ちていた。木の根元には成長途中の木の芽が生えており、「木の赤ちゃんだよ」と説明すると子どもたちは足元に気をつけて歩くようになり、自然を大切にするという気持ちにつながっていくことを教わった。落ち葉の「シャワー」や大きな葉っぱを使ってお面作り、コケのような葉っぱを使っのリース作り、洋服にくっつくモチツツジ、笹の葉を使って小川でリレーなど森の中を楽しむためのヒントが沢山あった。

ルートは決めたが細い道が続き、ただ歩くだけの時間が長いと感じた。探検時に子どもたちが飽きないように、どのように対応していくかが課題となった。また打ち合わせで決めた葉っぱを使っの製作は時間内に完了することが難しいことが分かり、下見でのヒントやスタッフからの話などを元にプログラムを再検討することとなった。子どもたちと一緒に下見を行うことで、子どもたちから教わることがたくさんあることに気づいた。子どもたちが実際に自然に触れ、遊ぶ様子を見て、自然は子どもたちの好奇心や探究心をかき立て、感性を豊かにするということを再確認した。

2-3 2012年10月21日（日）実施、森のムッレ教室当日の概況

2012年10月21日（日）岐阜市少年自然の家にて午前9時から森のムッレ教室が開催された。参加者は1歳児から小学6年生の19名であった。リーダーはにこちゃん、めぐっぺ、わっしー、嶋守先生、えりなリーダー、さわリーダーと私（八反彩織）の7名であった。今回の森のムッレ教室は秋の自然に触れることがテーマであった。森へ探検する前に、今日の活動の目的を伝えてリーダーの自己紹介や参加者が仲良くなるゲーム、自然の中での三つの約束の簡単な紙芝居をした。次第に19人の子どもたちの気持ちも引き込まれていき、元気良く森へ探検しに行くことができた。

森を歩き始めると、子どもたちは様々な葉や木の実などに興味を持ち、拾っては「見て見て」と得

意気だった。「これは何の実？」と子どもたちに質問されても、私自身の知識が乏しいために答えられなかった。質問に答えられなくても、子どもたちの疑問に対して、リーダーも共感しながら一緒に考える姿勢が大切である。すぐに答えを教えてしまうのではなく、子どもと共に考え、気づきや意見を共有していくことで子どもの思考や知識が深まる。そのため、子どもたちの興味の芽を摘まないためにも、私自身の知識を増やしたり、図鑑を用意したりすることの必要性を実感した。

森の探検中に、木の成長の実践やまつぼっくりのクイズを用意していたが、子どもたちはクリを探すことに夢中になってしまった。そこで急遽クリ探しを主な活動に変更した。始めは予定通りに進まないことに焦り、木の成長の実践やまつぼっくりクイズを無理にでも行おうかとも考えた。しかし、大人の都合で子どもたちの遊びの邪魔をしたり、制限することは良くないと子どもたちの楽しく遊ぶ姿を見て感じた。子どもたちは自分の興味のあることをとことん追求する。そのような子どもに合わせて、柔軟にねらいや内容を考えるべきであると分かった。子どもたち自身で自然と触れ合うためのきっかけを見つけたのであれば、それを最大限に利用し、つなげていくべきだと感じた。主役は私たちリーダーではなく子どもたちであり、リーダーは助っ人であることを再認識し反省した。

また、拾った木の実や捕まえた昆虫の色や形を見るにとどまらず、直接触ることやにおいを嗅ぐことをもっとすべきであった。「見る」「聞く」「触る」は子どもが頻繁に行う行動である。クリのにおい、コオロギのにおい、カエルのにおい。子どもたちにとってすでに身近なものにおいを改めて嗅ぐと新しい発見や感動が見つかる。まずはリーダーである私が実際ににおいを嗅ぎ、やってみせるべきだった。五感をすべて活用してこそ心に印象深く残り、自然への興味や関心を高めると実感した。

おやつタイムではスタッフの提案で落花生とゆでた落花生の食べくらべをし、予定通りに落花生の殻の実験ができた。落花生の殻の実験では落花生の殻と殻を入れたビニール袋を土中に埋めたが、その他にも空き缶やペットボトルなどを埋めると、エコロジーがより分かりやすかったように思う。落花生を埋めた場所に「森のムッレ」と書いた石を目印に置き、その後全員で順番に坂を下った。滑り落ちることを楽しみながら坂を下る子どもや、友達やリーダーの手助けをしながら下る子どももいた。

全員が坂を下り終えた後、芝生広場へ移動し、まつぼっくりクイズと葉っぱあてゲームを行った。最高学年の女の子が、まつぼっくりをペットボトルの中に入れることができた仕組みをみんなに説明した。葉っぱあてゲームでは、巾着の中に入っている葉っぱを触感だけで何であるか考え、分かった子どもたちはリーダーの耳元で答えを言う姿が見られた。全員が触り終えたところで、子どもたちと答え合わせを行った。今回の森のムッレ教室は何を行ったか子どもと振り返り、思い出を共有した。そして、ムッレから手紙をもらっていたが、その手紙をどこかに落としてしまったことを子どもたちに伝え、手紙探しを行った。木の陰から手紙を見つけ出し、リーダーがムッレからの手紙を読んで11月の森のムッレ教室への参加に対する期待がふくらむように森のムッレ教室を終えた。

実際に森のムッレ教室に参加すると、子どもたちは自分の意見や気づきを発表することによって、自分では気付かなかった新たなことを知り、自分とは違った意見を聞くことができ、知識が深まる。その際にはリーダーは子どもたちの意見を肯定的に受け止め、共感することで子どもたちも発表しやすくなり、自分とは異なる意見も受け入れやすくなる。リーダーが疑問に対し考えて解決しようとする

る姿勢を示すことで、子どもたちも協力しながら考える態度を身に付けていくのだと感じた⁽⁹⁾。

2-4 2012年11月18日(日) 実施、森のムッレ教室当日の概況

2012年11月13日のゼミの時間に、11月18日に行うムッレ教室の指導案の作成を、リーダーを務める八反、伊藤、私の学生3人と、ゼミ担当の嶋守先生と行った。今回は前回落花生の殻を埋めたため、その殻を活かして「循環」というテーマで行うことにした。11月18日の第二回森のムッレ教室では、他の嶋守ゼミ生全員と専攻科の学生がリーダーの補助に来てくれた。当日の朝、嶋守ゼミ生と、にこちゃん、めぐっぺ、私たちリーダー3名で下見をした。指導案ではムッレが登場したら坂を下り、広場で遊ぶ予定だったが、他団体がその広場を使用するため、計画を考え直すことになった。動き回るゲームにすると、坂があり危険なために坂を下らず、ムッレが登場する道で袋の中身当てゲームを行うことにした。ムッレに扮装したスタッフが登場するまでの隠れ場所を決め、下見を終えた。

9時から受付をし、森のムッレ教室をはじめた。今回参加した子どもは5歳児から小学6年生までの12名だった。はじめに一日の流れを説明し、活動の見通しが持てるようにした。ほとんどが前回参加している子どもだったので、前回の振り返りも行った。1ヶ月前のことで覚えていないことも多いと思っていたが、子どもたちの口から次々と前回行ったことが出てきて、しっかり印象に残る活動ができていたと感じた。導入の猛獣狩りも時間を決めて行ったことで、子どもたちもより楽しんでいった。五感を使うゲームでは葉っぱの匂い当てゲームを行った。「どんな匂いがした？」と子どもに聞くと「すっぱい匂いだった」「いい匂いだった」など、同じ葉っぱでも感じ方が違った。感じたことを言葉で表現することで、子どもの感じていることを共有できるため、問いかけていくことが大切であると知った。ピクチャーシアターは、子どもたちの様子を見ながら、森のムッレ誕生の物語のうち省けるところを調整し、問いかけながら進めることで、子どもたちも飽きることなく話を聞いていた。

今回は五感で感じられるものを縦横4マスの紙に書き、見つけながらビンゴをしていく、フィールドビンゴというものを行った。フィールドビンゴを取り入れたことで子どもたちは自然に興味を持ち、発見した時の喜びを感じていたようだった。1マスだけスペシャルという形で、自分で見つけたとおきの自然の物を書くようにした。どんなものがあったか問いかけると、「ねこみたいな葉っぱ」「リングみたいな色のどんぐり」など、日常にあるものに例えて答える子どもの姿が見られた。

ムッレ登場のとき、「ムッレが出てくる挨拶は何だった？」と問いかけると、「歌うたえばいいやん」と言った子どもがいたので、その場でムッレの歌を歌った。この子どもの一言で、ピクチャーシアターによりムッレ登場への期待を高められていると感じた。ムッレが登場した際、子どもたちは驚きで固まっていた。しかしすぐに興味津々でムッレに近寄っていく姿が見られた。「人間だ」とつぶやいた子どももいて、年齢が上の子どもでは、ムッレの扮装をしたスタッフが出てきただけでは「森にムッレが本当にいるのだ」というファンタジーをなかなか信じるのが難しいと思った。

その後ムッレとともに前回埋めていた落花生の殻を掘り、一ヶ月前とどのように変化したかを確認した。土にそのまま埋めた殻とビニール袋に入れて埋めたものを比べた。言葉で説明するより、触って確かめた方が感触の違いを感じやすいので、子どもたちにもビニール袋は土に埋めてもそのまま残っ

てしまうということが伝わったと考えた。袋の中身当てゲームでは、中身として入れた物を4種類にしたため、年齢の低い子どもには難しかったのではないかと感じた。しかし、指先の感覚に集中して、ムツレ教室の目的の一つである五感、特に触覚を用いて遊ぶことができたため、ムツレ教室らしい内容が子どもたちに伝えられたように感じた。ムツレが残していった手紙を見たくてしかたない子どもがいた。ムツレ教室の主役は子どもなので、その興味は大切にしたいと思ったが、他の子どもたちもいるなかで次に進めていくことに戸惑ってしまった。例えば「森の声を聞いてみよう」という声かけで静かにすることで子どもの気持ちを落ち着けてから手紙の進行を行った方がよかったと感じた。

手紙を読み、プレゼントが東屋に隠してあることを手紙で知った子どもたちの中には走り出す子どもがいた。早く、自分で見つけたいという気持ちでいっぱい、探している子どもたちはとても楽しそうだった。プレゼントをもらい、ムツレ教室の振り返りをしていると、「またやる？」と言った子どもがいて、子どもたちにとって楽しい時間を過ごすことができているのだと感じ、嬉しく思った。

ムツレ教室終了後の反省会では、循環の話の時に、ビニール袋は分解されないから捨ててはいけないことを三つの約束に関連させながら説明したほうが良いとの助言を受けた。今回の実践を通して、周りのリーダーや大人の反応、声かけで子どもたちの信じる気持ちや期待感が変わると感じた。ファンタジーの世界を伝える上で、大人の反応、声かけがとても大切になることを学んだ。

2-5 森のムツレ教室を実施しての学び

森のムツレ教室リーダー養成講座に参加し、森のムツレ教室を実施したことで自然を活かして子どもと遊ぶ方法や、注意すべきこと等を学んだ。ムツレ教室を終えて、ファンタジーとは、大人と子どもが同じ遊びの世界に入り込んで、気持ちを共有することなのではないかと考えた。その世界は、たくさん人の想像や発想など、現実と少しかけ離れた世界できている。しかし、この世界が自分の心の中にないと、子どもと心底楽しむことはできない。保育者として子どもと関わる際には、まず自分からファンタジーを大切にしていこうと改めて考えるようになった。森のムツレ教室で子どもがファンタジーを楽しみ、その中で遊ぶことを実感したのは、第1回目のおわりに、ある子どもが「その手紙、爪で書いている？」と言った出来事だった。ムツレから預かった手紙を読もうと子どもの前に立った。子どもたちには文章が見えないように読んでいた。ムツレの存在を信じて、ムツレの世界を想像しているからこそ、ムツレはペンを使わずに葉っぱに爪で文字を書くという子どもたちの想像につながったと考える。子どもたちがムツレの世界を楽しんでいるからこそ、こうした発想が生まれたのだ。

この出来事が起きるまでに子どもたちのムツレの存在への期待を高めることができなければ、子どもの中にムツレが実在する世界を作りきれず、手紙を爪で書いたという発想は生まれなかったと考える。子どもの発言で、子どもがその世界を楽しむには大人の声かけや関わりによる、環境作りの大切さに気づくことができた。子どものファンタジーは、遊びの世界観を広げるためにとっても重要だ。既製品を使うより自然物を使って遊ぶほうが想像の幅も広がり、一人ひとり違った考えで遊ぶことができる。子どもたちが自然の中で五感を活用して遊ぶことで想像の世界も広がる。そうした経験を重ねることで相手を思いやる心を育くみ、自分の思いを表現することにも繋がっていくと考えた⁽¹⁰⁾。

おわりに

かけ足で筆者のゼミ生たちが開催した2012年度の森のムッレ教室の概要を紹介した。2013年3月を目前にして、この二年間、ともに笑って泣いて過ごした筆者にとってのはじめてのゼミ生が卒業していく現実がある。「彼女たちがまちにまぎれて消えてゆく」寂しさのなか、筆者たちには互いに口にし合う合言葉がある。「コリコック！ スウェーデンの森で会おうね」卒業後、彼女たちは筆者と一っしょに本場の森のムッレ教室に参加しようという壮大な計画を夢見ているのだ。

「そのことにすこやかに対処するのは とてもむづかしい」だろう。ただ、そのいつかをみんなで実現しようという森のムッレ教室がくれた私たちのファンタジーを、これから離れて過ごす毎日のなかで胸に抱けることは幸せだ。しかし、もう一つ。筆者は実現しようと考えている計画がある。森のムッレ教室の「指導者養成講座」を、必ず本学で開催しようということだ。

森のムッレ教室を開催する資格であるリーダーを指導できる「指導者養成講座」を受講するための条件がいくつかある。それは①ムッレ教室のリーダー養成講座を受講して、五年以上経たリーダーであること。②ムッレ教室を開いた経験、あるいは教室に参加した経験が五年以上あること。③ムッレ教室のリーダー養成講座の開催に、スタッフとして協力した経験があること。④今後、ムッレ教室リーダー養成講座の講師として活動する意欲があること。⑤現在もムッレ教室にかかわって活動していること。⑥本部役員と講師から、協会の発展のために必要と認められる人、この六点である⁽¹¹⁾。

指導者養成講座を受講できるようになるまでの、これから先の五年間。まずはそのはじめの一歩として、現在の筆者の3年ゼミに所属する11名と、今年仲間にしていただいたNPO法人長良川自然学校の森のムッレ教室リーダー養成講座に参加する約束をした。まずはこんな日々をこれからずっと積み重ねていこう。森への道はまだ始まったばかり。『森』はいつでも未完だからこそ、とても楽しい。

謝辞 本稿で示した嶋守ゼミ生による森のムッレ教室開催には日本野外生活推進協会の高見豊会長、西躰通子先生、特定非営利活動法人長良川自然学校のスタッフ、にこちゃんこと内藤孝洋氏をはじめスタッフの皆さま、鈴木輝久氏、森のムッレ教室をご紹介下さった新評論社長、武市一幸氏に多大なるご尽力をいただいた。ここで厚く感謝の意を述べたい。本当にありがとうございました。

注

- (1) 岡部翠 (2007) 『幼児のための環境教育 —スウェーデンからの贈り物「森のムッレ教室」』 新評論
- (2) 岡崎京子 (2011) 『未完作品集 森』 祥伝社 6頁
- (3) 日本野外生活推進協会パンフレット「UT I NATUREN 自然の中へ出かけよう」 日本野外生活推進協会 (本部・事務局 兵庫県丹波市市島町上牧 691。URL は www7.ocn.ne.jp/~mulle/)
- (4) 岡部前掲書 12-23頁
- (5) 森下恵美子・中山智晴 (2010) 「幼児向け環境教育『森のムッレ教室』が参加者に与えた影響」『文京学院大学人間学部研究紀要』第12巻 13頁
- (6) スティーナ ヨハンソン (1997) 『自然のなかへ出かけよう』 日本野外生活推進協会 159頁
- (7) 岡本理子 (2010) 「幼児期における自然体験の環境教育的意義の一考察 —秋田・森の保育園の事例から」『桜美林論考 自然科学・総合科学研究』第1巻 41頁
- (8) 伊藤絵里奈 2012年度卒業論文「森のようちえん —自然環境のなかでの保育・幼児教育」第2章を加筆修正
- (9) 八反彩織 2012年度卒業論文「子どものための、のびのび環境教育 —保育と森のムッレ教室」第2章を加筆修正
- (10) 青木佐和 2012年度卒業論文「こどもの自由って何だろう? —シュタイナー教育から考える」第2章を加筆修正
- (11) 岡部前掲書 142頁

「共に共有する」音楽づくりを考える —シアトルの子育て支援や幼児音楽教育の実践から—

保育科 高須裕美

はじめに

筆者は2010年度より、国外研修制度でワシントン州立大学音楽学部に研究員として在籍した。その間、子どもを取り巻く音楽環境、小学校低学年に至るまでの音楽教育の方法論、コグニティブ教育、民族音楽、そして西洋音楽以外の音楽の授業への取り入れについて研修した。また、地域の子育て支援、幼稚園、保育園で展開されている音楽あそび、シアトルシンフォニーで運営されている子どものための音楽活動広場（サウンドブリッジ）、ユーリズミック（リトミック）第一人者、Julia Black氏が教える音楽教室を長期的に観察した。

本稿は、研修制度中に見えてきた子育て支援を展開する上での音楽の課題について、その課題解決へとつなげるために必要な音楽的なコミュニケーションのあり方について述べる。さらに、子どもの音楽あそびを、単発的に行われる「子育て支援」の枠組みの中で、実践している指導者に何ができるのか、シアトル市での取り組みを紹介する。植田（2004）は、「現代は、『子育て支援』を通して、保育実践の理念が一人ひとりの保育者、指導者に問われている」と述べている¹⁾。低年齢の子どもの音楽に関しても、様々なメソッドや指導者が存在する。このような時代だからこそ、教育現場だけではなく、地域や家庭で子どもと関わる大人が、子どもとの音楽あそびの関わりで何を大切にすべきなのか考える手がかりとしたい。

1. 日米に共通する「子どもの音楽」の課題

文化、言語こそ違ってもとはいえ、子どもを持つ親として、音楽を楽しむ我が子の姿が見たい気持ちは世界共通である。

アメリカ、カナダでは、コロラド州で1996年に設立されたThe Baby Einstein Companyに代表されるような、3ヶ月から3歳までの子どもを対象にした、おもちゃや映像などの子ども教材が未だに人気がある。おもちゃやVTRのBGMは必ずモーツァルトやバッハなどのクラシック音楽を使い、大人が選ぶ“いわゆる”質の良い音楽を与えるという、赤ちゃんから子どもを対象にしたビジネスが数多くある。また、一世代前に一世風靡したロック歌手が、子どもを持ったことをきっかけに、子ども向けの歌を作り、親たちは自分の青春時代の音楽を思い出しながら、子ども達はロックのリズムに喜びダンスするというスタイルで、成功している歌手もいる。

日本にも子ども教材は同じように存在する。色の名前を織り交ぜながら、音楽に合わせた身体表現を見せて子どもの動きを促すもの、トイレトレーニングや歯磨きなどの生活面の自立を教えるも

のなどが挙げられる。また、70年代80年代のヒット歌手が徐々にテレビに登場し子どもの歌を歌っているのを見て、驚かされることもある。言語こそ違いが、子どもの音楽教材の時代の流れにも共通する部分がある。

しかし、子ども自身の表現力をリードするため必要なことは、このような一方的な音楽を与えることなのだろうか。ピアノやバイオリンを幼い頃から器用に弾くという技術ではなく、その子ども自身の表現力を育てることに焦点をおいた場合、日米両国に同じような改善点があると言えよう。

音楽表現活動には、大まかに分けると以下のような活動内容が挙げられる。

- ①聴く活動
- ②歌う活動
- ③楽器を奏でる活動
- ④身体表現活動
- ⑤想像活動

この枠組みの中で考えると、日米などの先進国の音楽教育活動には、次のような今後の課題に共通するところがある。

1. 演奏者から子どもへ一方的に送られる、受け身の音楽劇や映像が充実している。その一方で、子どもが参加できる音楽活動に参加できるチャンスが少ない。
2. 子どもの音楽への興味は、音を奏でたり、歌ったり、演奏したりすることである。繰り返し同じ体験して熱中していくが、他人と音を共有する、いわばコールレスポンス（掛け合い）のコミュニケーションを経験する機会が少ない。
3. 楽器奏法の習得や、歌声の音程に保護者の関心が偏っている。

これらの特徴は、一世代昔の音楽クイズ番組のように、始めの音を聴いた瞬間、何の曲かすぐに答えられる力、楽器奏法の際の正確性、絶対音感を育てる要素は伸ばすであろうが、想像力や表現力という観点を軽視した結果とも言えるのではないだろうか。すなわち、一方的に与えられる音楽を聴く、楽譜に正確に音楽を弾いたり歌ったりする活動だけでは、自分の感情や、自己主張を自由に音や身体で表現したり、日常生活の中で沸き起こるさまざまな感情を表したりする力は伸ばせないのである。例えば、日本の小学校音楽教育のユニークな特徴としてピアノ教育が挙げられる。この音楽教育には、音の高さを知ったり、鍵盤楽器を奏でて曲を演奏することを楽しんだりする目的があるが、表現力を育てることをねらいにした音楽教育という観点には当てはまらないということは言うまでもない。われわれ親や指導者は、打楽器、鍵盤楽器を達者に弾けるようにその場を提供したことで満足せず、シンプルな音楽活動から生まれる子どもの「個性ある表現力」に共感し、自由に表現する姿を評価して伸ばしたいのである。

2. 指導者や演奏者と参加者が共につくる音楽コミュニケーション

それでは、共につくる音楽活動というのは、どのようなものだろうか。

基礎的な音楽感覚には、「強弱感・高低感・速度感」の3つの感覚が挙げられる。

例えば、仮に「かえるの歌」を題材にしたとすると、通常の高さの音で弾き、しばらく楽しんだ後、小さな動物や赤ちゃんがえるなどのイメージさせる言葉を添えてから、高い音で弾いてみる。何度か繰り返すことで、子ども達がジャンプする動きが変わるだろう。それに加えて、大動物や大きなかえるのイメージを添えて、通常の高さから一オクターブ下げた音で弾いてみるとどうだろうか。その際に、大きな足音のような音で弾くと、高い低いという感覚と同時に、強く大きな音も感じる事ができる。このように、高低感と強弱感を何度か経験させた後は、子ども達に3つのどの動きを次にやってみたいのか、子どもに選ばせて、何度か繰り返す。

速度感も同じ要領で楽しむことができる。早いテンポと遅いテンポを楽しむ他にも、時々歌や音楽を止めて、ストップモーションを楽しむこともできる。多くの子どもは、声やハーモニーではなく、リズムが好きである。そのため、伴奏楽器は、ピアノを用いる事が多いが、指導者は、ギターやアコーディオンなどのコード楽器と打楽器を使用しても楽しいだろう。楽器が何も無い場所では、大人が声を合わせて歌うことでも十分楽しめる。

音楽は言葉で表現できない気持ちを表し、感じる一つのツールでなければならない。だからこそ、複雑に考えすぎず、ねらいを「強弱感、高低感、速度感」のみに焦点をしぼり、答えの無い音楽の楽しさを繰り返し経験することが大切なのである。

もっと簡単に述べるとするならば、自分の好きな音楽をかけて、子どもと楽しく踊るだけでも音楽の空間は作れるはずである。われわれ子育て支援をリードする者は、何か子ども達に提供しようと気負わずに、見る活動、聴く活動の配分を少し減らし、子ども達と共に音楽を共に楽しむ活動を増やすことができれば、どれだけ互いに楽しめるだろう。音楽に合わせて共に表現することで、子どもと親との心もほぐれる。そして、お互いに体を動かす姿を認識する事が刺激になり、子ども同士がコミュニケーションを交わす場面が自然に出てくる。また、このような言葉を越えた音楽活動が親同士の交流のスタートにもなるかもしれない。

文化的な違いだが、日本の親同士のコミュニケーションは、カジュアルなアメリカに比べると親しくなるまでに時間がかかる。多数の親同士とは関わらず、自分の周りの少数の大人とまずは仲良くなり、そして広がりが増えていくというステップがある。その段階をなるべく早く進めるためにも、音楽活動、音でのコミュニケーションを増やし、指導者と子ども達、または親と子どもの間で行われるコールレスポンス（掛け合い）のような活動を増やすことが、互いの心の鍵を開くキーワードになるだろう。

3. シアトル市で行われている子どもへの音楽活動

では、具体的に子どもを巻き込むような、弾き手と歌手にコミュニケーションのある音楽実践活動にはどのようなものがあるのか。

前述のとおり、筆者は自分自身から生まれる表現を導きだすような、その場所にいる全ての人が音楽創りを共有する活動が大切であると述べている。それは、鼓笛隊からではなく、全員合唱ではなく、手話を伴う歌ではない。ましてや、ピアノに合わせて全員が同じ動きをするという身体表現からでもない。ワシントン州で見学することができた、音楽を共に共有する、想像力を生かした音楽活動が取り入れられた音楽活動の例をいくつか挙げる。

1. サウンドブリッジでのドラムサークル

NPOとして運営されているサウンドブリッジは、シアトルシンフォニーの本拠地ベネロイヤホールの中にある地域に開放された子どものための音楽体験施設である。小さな演奏会もできるようなホールその他、プレイエリアには弦楽器、ティンパニー等の打楽器、民族楽器などを子どもが実際に触れられるように展示されている。無料の音楽あそびのクラスが0-1歳、2-5歳対象に週数回行われている。



その中で、毎週土曜日の13時から30分間行われている、ドラムサークルを取り上げる。誰でも参加できるが、土曜日の昼に開催されることから、父親と3-5歳の子どもの参加が多い。参加者全員がサークルになって座り、それぞれが打楽器を一台ずつ持つ。会をリードする指導者がリズムを鳴らし始める。1分程度自分の創ったリズムを演奏すると、隣の参加者が違うリズムで加わる。そして、隣の参加者も入り、混ざり合ったリズムを一人ひとりが重ねていく。最終的には、円の中のメンバー全員が打楽器を演奏している状態になり、リーダーが終わりのサインを出して全員のリズムが終了する。打楽器を弾きたくない子どもや、身体表現で気持ちを表現したい子どもは、オーガンジー素材の布を持って音楽の流れを表現したり、大きな打楽器のリズムに合わせて踊ったりしている。10人から20人の参加者全員が弾き終わるまで、15分程度かかる。打楽器を変えて同じ内容を繰り返し、30分で終了する。ドラムの活動のみで、導入や絵本などは行っていない。参加者全員で音楽を創った後は、達成感を感じて解散する。



2. ランチボックスのおかずになって表現あそび

Mr. Darby氏による保育園での音楽あそびは、子ども達にとっては月2回の楽しい音楽の時間だ。彼の魅力は、子どもに発言させる機会をセッションの中で数多く作り、子どもの発言を元に、ソロ(solo)の回数を意識的に取り入れて歌や音楽を完成させるところにある。

例えば、お弁当の歌（16小節くらいの自作の曲）では、お弁当の中のおかずは何が良いかと子どもに問いかける。子どもは、ウインナーやチーズ、サンドイッチなどと言い始める。一人を指名して、子ども達の前に登場させてウインナーを身体表現させる。次に指名された子どもは、前に出てチーズになりきり、隣に座る。指導者側が提示した身体表現ではなく、子どもの想像力を掘り起こし、実際に皆の前で表現させることを答えのない自由な感性として評価し、一人ひとりに経験させる。お弁当の歌は、人数分繰り返し歌うので、15人の子どもがお弁当箱に入ったころには、歌詞を覚えて口ずさむ子どもも出てくる。

これらは、指導者と参加者が繰り返しの練習無くできる音楽作りの光景である。例1のドラムサークルでは、指導者は特に言葉での指示や指導はせず、リズムでのコミュニケーションに徹底している。子どもだけでなく、保護者も同じように言葉を打楽器で気持ちを発散させることができることに意味がある。例2では、子どもと対話しながらどんな音楽にするのかを話す、Mr. Darby氏によるきめ細やかに設定しすぎない音楽活動のゆとりが見られる。その裏には、彼の経験の長さや突飛な返答にも対応できる余裕があるだろうが、難しいことを子どもに要求しすぎず、音楽の楽しさ、想像することの面白さを追求するところに、共につくる音楽が見える。

アメリカのユーリズミック研究と実践をリードしてきたJulia Black氏のクラス（3歳から6歳）では、7-8人のクラスで構成され、リトミック考案者のジャックダルクローズの理論に沿って、子ども同士が音楽に合わせて身体表現をしている。一連のセッションの中で、1)お互いの手をタッチさせる接触、2)一人が表現した身体表現に対して、他の子どもがその一人の動きに声で効果音をつけるといったような身体表現活動、いわば、音で表現されるようなコミュニケーション活動が主に取り入れられている。日本では、即時反応^{註1)}が先行しつつあるが、氏のセッションでは、できるだけ言葉での指示を少なく指導しており、音楽の流れに乗って、他とのコミュニケーション、他の人と音楽空間を作る喜びを教えるものであるということを根拠に展開している。

4. 地域で行われている子育て支援

子育て支援は、当然シアトル市でも行われている。開催場所は、地域の図書館で、0-1歳、2-5歳というように二つのグループに分けられ、ほぼ毎日行われている。また、教会や公民館などでは「プレイデート」という名目で、室内の子どもの遊び場を開放している。個人的にグループでやっている子育て支援を検索すると、日本と変わらない数の子育て支援グループが存在する。

アメリカの保育施設の保育料は所得によって変わるが、フルタイムで預けて10万円前後が相場であることから、保育園には預けられず、夫婦で働く時間を調整したり、ナンニを雇ったり、ベビーシッターを定期的に使ったりしながら、子育て支援を利用している親子は多い。興味深いのは、地域の子育て支援の場には、母親や父親、祖父母と来る子どもの他、ベビーシッターやナンニと共にやって来る子どもも2割以上いることだ。

また、子育て支援の中でも、シアトルの地域性が見られるのは、中国語、インド、日本語、スペイン語、ロシア語などの英語以外の子育て支援が行われていることである。シアトルは、テクノロジー関係企業の本拠地が多くあり、外国から派遣されてくる家族、移民の家族も多い。子どもに母国語に触れさせる機会を与えるために、英語以外の言語での子育て支援も公立図書館などで設定されている。また、近年シアトル中央図書館では、聴力に障害を持つ子どものための読み聞かせの時間も不定期で始められたこともユニークな試みだった。土曜日のお昼は、「ファミリーストーリータイム」も行われ、週末しか家族で過ごせない親子を対象に年齢制限をせずに開催している。

図書館での子育て支援は、市の子育て支援担当者によって運営されている。概ね30分程度だが、導入から数えると活動内容は多い。仮に、雨をテーマにした子育て支援（2歳以上）では、以下のよ様な活動内容が実践されている。

1. 手遊び歌／身体あそびを伴う歌（5曲程度）
2. 「雨」に関するパネルシアター
3. 「雨」に関する絵本
4. 絵本テーマにちなんだ音楽を全員でダンス
5. 打楽器を持って「雨」に関連するCDを聴きながら合奏
6. シャボン玉を実際に見ながら音楽に合わせてダンス



活動内容がやや多いため、活動一つひとつを味わう時間があれば、子どもも指導者も存分に楽しめるだろうという印象がある。しかし、子ども達が実際に動く活動が十分確保されており、担当者と子どもと保護者が、共に動いたり歌ったりする活動をすることを意識して構成されている。子育て支援担当者は、活動内容4,5,6の全員でのダンスや合奏では、必ず子どもの中に入り、音楽やあそびを提供するだけの立場ではなく、子どもと保護者と同じようにダンスを楽しんでいるのが日常的な光景である。その他にも、子ども劇場のような催しが、長期の休みに開催されている。

5. 保育子育て研究所での音楽あそび（平成24年11月27日）での実践

1節で示した5つの音楽活動を取り入れ、すべての活動を「親子で共に共有する」という目的で行った。

1. 合奏活動では、子ども達には、実際にスズやマラカス、カスタネットなどの打楽器を持たせて合奏に参加してもらう。



2. 強弱で楽器を鳴らすこと、速いテンポ、遅いテンポを経験する。
3. 絵本「だっこだっこ ねえ だっこ」(長 新太作)の読みきかせでは、ページとページの間に、学生が作った^{註2)}4小節の音の主題を入れた。最後に大人が子どもを抱きしめる動作を入れて、親子でのスキンシップを促す。
4. 季節の歌のメドレーでは、歌詞にちなんだ身体表現を子どもに見せて、歌に参加できるように最低2回は歌う。
5. シャボン玉遊びをしながら、秋の歌などを聴いて自由に体を動かす。

坪能(2012)は音楽構造(音楽の仕組み)を「反復する、模倣する、会話する、重ねる、付け加える、間に入れる、変化させる」であると述べている²⁾。筆者は、子ども達がつくる「すべての音」を、いったいどのようにしたら自分たちのつくる音楽に生かしていくことができるのかという疑問を、効果音をつくる活動に傾斜するのではなく、子ども達の鳴らす「音」と、私たちがつくる「音楽」をむしろ存在にしたいのである。今回の子育て研究所での活動においては、絵本のページをめくる毎に間に入れた音楽、子ども達の模倣で成立した秋の歌メドレーなど、この音楽構造に直結するあそびも含まれている。

これらの事例は、日々の活動のほんの一例だが、特に小さい子どものコミュニケーションや表現力は、家族の中で身につくことが多いことから、親子で共に同じような動きを楽しみ、歌う活動で、表現の幅を広げていくことができるのではないかという展望をもっている。

おわりに

あらゆる気持ちや感情は、小さな子どもの頃から沸き起こるが、それらの気持ちの中には、親や保育者に代弁できないような気持ちもある。そのような気持ちを絵に描くことや音楽を奏でたり感じたりすることで、心の状態も安定すると考えられる。しかし、タイトルの通り、言葉にできないような気持ちを、実際の音楽あそびで他者と共有する経験を積み重ねることで、自己感情を他者に伝える気持ちを閉じ込めず、整理のつかない感情も自分で受け止めることができ、相手が理解できる表現方法で伝えられるようになるのではと考える。子育て支援室にやってくる子ども達は、集団保育の年齢段階に達していない子どもを持つ家庭がほとんどで、保護者と自分との世界から、周囲の子どもや大人と何かを共有するというのは不安も伴うだろう。仮に、その子どもの「親と自分の世界」の壁を取り除くためにも、音楽あそびが“友達や先生と共有できるような楽しい時間”になれば、子どもはきっと心を開いてくれるだろう。私たちには、そのような楽しく、自分の心の中で完結する遊びではない音楽あそびを用意することが求められていると思う。

註1) 音や合図で聞き分け、即時に動きを変化させるという、リトミックの要素の一つである。

註2) ミ・ソ・ラ及び、八分音符(♪)、四分音符(♩)のみ使用して4小節の短い曲を作曲させる。音の限定については、コダーイ理論に基づいている。

引用文献

- 1) 植田章 (2004) 「はじめての子育て支援」かもがわ出版 第3版 p.49
- 2) Trevor, Wishart. (1975). *Sounds Fun. A Book of musical Game*, SCDC Publication
Trevor, Wishart. (1977). *Sounds Fun2. A Book of musical Game*, Universal Edition
坪能由紀子・若尾裕 (共訳) (2012) 「音あそびするものよっといで」音楽之友社 pp.90-92

参考文献

- Campbell, P. (2010). *Songs in Their Heads: Music and its Meaning in Children's Lives*, Second Edition .New York: Oxford University Press.
- Bonnie C. WADE. (2004) *Thinking Musically* New York Oxford: Oxford University Press
- 駒久美子・味府美香・木村充子・古山律子・坪能由紀子 (2009) 「幼児の創造的な表現を育むものー4歳児における即興的・創造的活動事例の検証を通じて」 「音楽教育学の未来」日本音楽教育学会編 音楽之友社
- 小島律子 (2001) 「総合的な学習」における学習方法としての「構成活動」の有効性 日本デュニー学会紀要, 42, 149-174
- Heywood, C. (2001). *A History of childhood: Children and childhood in the west from medieval to modern times*. Oxford University Press.

いっぽんばしわたる —絵本のイメージを表現してみよう—

名古屋市九番保育園 古田美津子

1. はじめに

九番保育園は、名古屋市港区にある公立の保育園です。中川区、熱田区とも近い九番団地の中にあり、保育園では、日本以外にブラジルやフィリピン、中国、ミャンマーなど、さまざまな国の子どもたちが一緒に生活しています。その比率は85%を超え、日本人の子どもよりも外国籍の子どもたちの方が圧倒的に多いという少し特殊な環境の保育園です。

外国籍の方の中でも大多数はブラジル人です。保護者は日本語が通じない方が多いため、保育園から出すお知らせやおたより等は、保育園に常駐している通訳者によってポルトガル語で翻訳しています。子どもたちは、入園当初は日本語がまったくわからない子でも、しばらくすると日本語での会話が少しずつ増えてきます。

外国籍の子どもたちの日本語の理解の程度はさまざまですが、生活の中ではたいして不自由なく日本語を使用しているように見える子どもでも、抽象的な表現はイメージしづらいようで、歌の歌詞の意味や絵本の読み聞かせなどでクラス全体がイメージを共有するのは、とても難しいことです。そこで、身体を使って楽しみながら言葉の意味を理解できるよう、「0～5歳児の楽しさはじける表現遊び」浅野卓司・田端智美編著の中から「わにがわになる」、「いっぽんばしわたる」をヒントに次の実践に取り組みました。

「ねらい」

- ・身体表現を楽しみ、友だちと一緒に活動することの喜びを味わう
- ・日本語の言葉の意味を知る

「内容」

- ・友だちとイメージを共有して表現しあうことを楽しむ
- ・実際に身体を動かしてことばの意味を知る

「指導上の配慮事項」

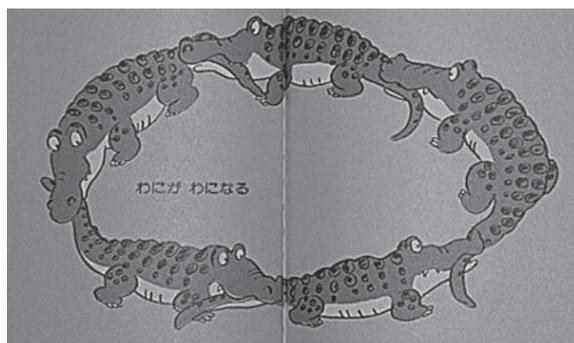
- ・表現方法は自由にして、子どもの発想を大切にする
- ・友だちの表現にも目を向けるようにする



2. 当日の様子

3、4、5歳児12～13名が遊戯室に集まり、『わにがわになる』^(注1)の絵本を見た後、次に『いっぽんばしわたる』^(注2)の絵本を見ました。「わにがわになる」の意味はほぼ全員が理解できましたが、「ねこがねころぶ」、「からすがこえをからす」などの表現は、「ねころぶ」、「(声を)からす」という言葉の意味がわからなくて他にも理解が難しかったものが多かったようで、ほとんどの子どもたちがぼかんとした様子でした。

読み終わったあとで、みんなでワニになって輪になってみました。子どもたちがよく知っている「ワニがおよく」の歌に合わせてワニになったままぐるぐると歩いて回るとみんなとても楽しそうでしたが、言葉あそびの楽しさを全体で共有することはできませんでした。



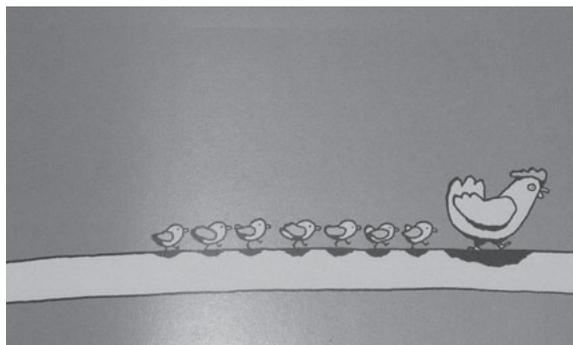
次に読んだ『いっぽんばしわたる』の絵本では、いろいろな渡り方の表現について、保育士が動物の表情や体の様子を1つずつ確認しながら身振り手振りも入れて読み進みました。

読んでいるうちに、その場で子どもたちが各々表現をやり始めました。子どもたちが思い思いに表現を始めたので、私は室内にあった長ベンチをそこにもってきていくつつなげて置き、いっぽんばしをイメージしてみました。

(1) ならんでわたる

まずはじめに「ならんでわたる」を表現してみることにしました。

「ならんでわたれる人いるかな？」と私がきくと、全員が「はい！」と嬉しそうに手をあげました。どの子も自信たっぷりの表情だったので、全員に前に出てきてもらおうと、何も言われなくても子どもたちは上手に前の子との間隔をあげながら並んで渡って行きました。これは絵本の通りに表現することができるので、3歳児にもとてもわかりやすかったようです。



(2) からんでわたる

「じゃあ、からんでわたれる人いるかな？」と私がきくと、「はい！はい！はい！」と、ほとんどの子どもたちの手があがりました。

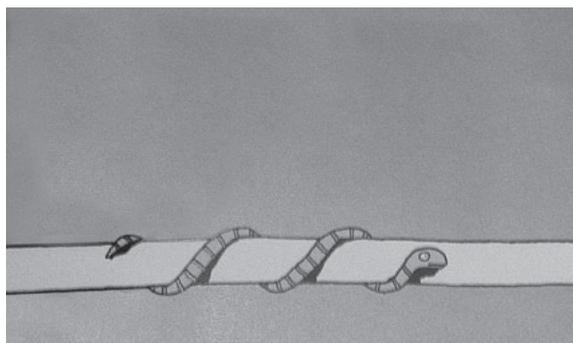
しかし、絵本の中では蛇がぐるぐる橋に巻きつくようにからんでいる様子を、子どもたちがどのように表現するのか想像しづらかった私が、「からんでわたるって、どうやってわたるんだろう？先生もよく考えないとわからないなあ。…Yちゃん、前に出てきてやってくれる？」と5歳児のY子(日本)を当てると、Y子は自分が当たってしまったことに戸惑った様子で、少し首をかしげながらゆっくり出てきてベンチの前で止まって考えこみました。

はりきって手をあげてみたものの実際に当てられてしまい、みんなの注目を浴びて戸惑っています。Y子の緊張した気持ちが私にも伝わってきました。

私が、「いいよ。ゆっくり考えてみてね。絵本に出てくるのはヘビだったね。」と声をかけると、しばらく下を向いて考えていたY子は、少し迷いながらゆっくりベンチに腹ばいになり、次に決心したようにくねくねさせた手足を交互にベンチの下にくぐらせながらゆっくり前に進んでいきました。

絵本の中のヘビとは違う、自分なりの「からんでわたる」を考えて見事に表現したY子に驚いた私が、「うわあ！みんなYちゃんがからんでわたっているように見える？」と他の子どもたちにきくと、なりゆきを緊張した様子で見守っていた子どもたちは一斉に「みえる！」「本当にヘビみたい！」と口々に笑顔で答えました。

表現をし終えたY子は、緊張が解けた満足そうな笑顔で、照れくさそうにみんなの方を向いて立っていました。

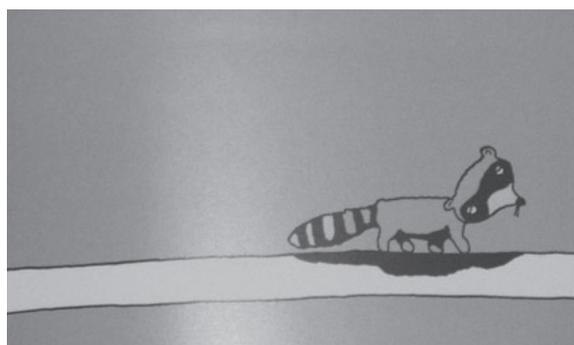


(3) ぼんやりわたる

「ぼんやりわたる」は、絵本の中のたぬきの顔がとても印象的です。

私が、「ぼんやりわたる…だって。たぬきさん、なにか考えながらわたっているのかなあ。」「このたぬきさんの顔を見てみて。なにを考えているんだろうね。」と子どもたちに問いかけると、みんなは私の話が終わらないうちに「はい！はい！はい！」と、われ先にと手をあげて、早くやりたくて仕方がない様子でした。3歳児も身を乗り出して手をあげているので、「じゃあ、みんな出てきて順番にぼんやりわたってみようか！」と、全員にやってもらうことにしました。

すると、みんなはわれ先にと小走りで急いで出てくるのですが、ベンチの上に四つばいになると、まず表情がとろんとして次にゆっくりのんびりと、まるで絵本のたぬきのような顔で渡り始めました。どの子も順番を待っている時の様子とは一変して、自分の番になるととろんとした表情になるので、3歳児から5歳児まで、絵本のたぬきと同じような表情の子どもたちの行列になりました。横で見ていた保育士たちは、「すごい！ぼんやりさんがたくさん渡ってる！みんなとても上手だねえ。」と、子どもたちの見事な表現に、思わず顔を見合わせて笑ってしまいました。



(4) げんきにわたる、げんきにおちる

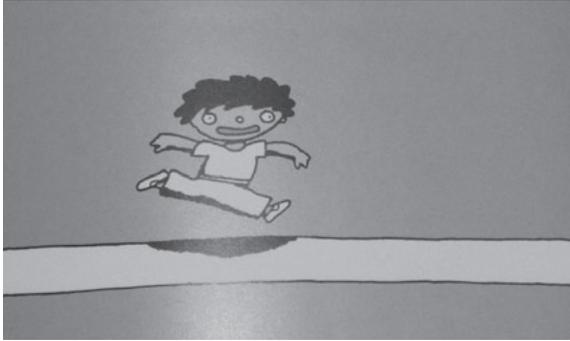
私が、絵本を見せながら、「この子すごく元気に渡ってるね。みんなもこんな風に元気に渡れるかな？」ときくと、子どもたちからは「できる！」という返事が返ってきました。

「じゃあ、『元気に落ちる』はどうしよう？」ときくと、「頭から元気に落ちるんだよ」と、5歳児の女の子（外国籍）が絵本の絵の通りにこたえました。「でも、本当に頭から元気に落ちちゃったらみんなは死んじゃうかもしれないよ？」と私が言うと、5歳児の違う女の子（日本）が「じゃあ、本当に落ちるんじゃなくて、元気にジャンプしたら？」と言いました。周りにいた他の子どもたちもうなずきながらきいています。

私が「それいいね！それじゃあ最後の落ちるところは、元気にジャンプすることにしようか。」「じゃあ、みんな出てきて並んでね。」と言うと、どの子も嬉しそうに出てきて並び、順番に元気に勇ましい足取りで歩いて渡り、最後は勢いよく元気にジャンプをして飛び降りていました。

表現し終わった子たちはみな、ベンチを渡りながら表現している他の子どもたちの様子を振り返って見ながら笑顔で自分の席に戻っていきます。

実際の「落ちる」ということとは意味が違う表現方法ですが、頭の中では「落ちる」という共通のイメージを持ちながら、それを「ジャンプする」という、どの子も同じイメージで表現することをとても楽しんでいる様子でした。



げんきにわたる



げんきにおちる



3. おわりに

絵本のイメージを共有しながら表現することに取り組んでみた今回の実践は、抽象的な「ぼんやり」や「からむ」など、言葉として少し難しい表現も含まれていましたが、子どもたちの年齢や国籍に関係なく、絵本の絵によってイメージしやすかったのではないかと思います。

保育士と一緒に絵本を見ながらどの子も「今すぐ自分で表現したい」という気持ちが高まり、積極的に手をあげていました。

子どもたちは、どの子も楽しそうに生き生きと表現をし、また、他の子の表現にも興味をもち、お互いに見あっては笑ったり友だちの表現を認めたりしていました。

絵本通りの動きが実際には不可能な部分もありましたが、1人ひとりの頭の中では絵本の中の絵をイメージしながら、どれだけそれに近い表現ができるか、一生懸命に考えて工夫をしていました。

そして、それを見た子どもたちが、互いの表現を納得して認めあったり、ベンチの下にくねくねと手や足をさし込むことで「からむ」という表現をした友だちを見て、新しい表現方法の発見もできました。

今回の取り組みのように、ことばの理解が難しくてもイメージしやすい絵本などを使い実際に体を動かしてみることで、全員が楽しみながら共通のイメージをもって日本語の言葉の意味を獲得できることを実感しました。

外国人の両親のもと、日本で暮らす子どもたちは言葉の面で大きな問題を抱えています。保育園に通う子どもたちの中には、言葉を獲得していく大切な幼児期に両親の母語と日本語という複数の言語が混在する環境の中にいるため、発語がゆっくりであったり、両方の言語について正しい使い方ができていないという、子ども自身が混乱している様子が見られる例も少なくありません。

このままもう少し大きくなると、学校生活でつらい思いをしたり、ひどい場合には不登校になってしまうこともあり、さらに成長すると、進学や就職にもとても苦勞をしてしまいます。

自分の中に柱となる言語がないと、ものごとをイメージするのはもちろんのこと、何かについて考えたり、また、自分の思いや考え等を相手に伝えることがとても困難なことになるからです。

そして、この状態を放っておくと、母語も日本語もきちんと理解できないまま成長してしまうことになり、「ダブルリミテッド」といわれる、学校での勉強や家庭内でのコミュニケーションにも支障をきたしてしまう状態になりかねません。

そこで、この問題については職員がそれぞれ研修に参加して勉強をしたり、情報収集を行ったりしながら、園内で時間をかけて話し合ってきました。

そして、いま私たちが保育園でできることは、子どもたちに正しい日本語を丁寧にきちんと伝えていくことと、保護者に対しては子どもが母語を獲得することの大切さを伝えることであると考えました。

多くの保護者は、リーマンショック以降の不安定な経済状況である日本の生活の中で、保護者自身も言葉の壁にぶつかりながら雇用問題、社会保障の問題など多くの課題を抱えていて、とても大変な状況であると思われます。

しかし、そのような状況の中でも、保育園に通う子どもたちの教育問題についての重要性を伝えていくことは私たちにしかできないことであり、とても大切であることを職員間で確認しあいました。

私たちは、保育園の子どもたちのあふれる笑顔や笑い声に毎日囲まれながら、国籍に関係なく、どの子どももみな健やかに成長してほしいと心から願っています。

そのためには日常生活の中だけではなく、保育士がこうした楽しい取り組みを創意工夫しながら、子どもたちが日本語の語彙を広げたり、さまざまな言葉の意味を理解しながら正しい日本語を習得していくことができるようにこれからも努力していきたいと思っています。

参考文献

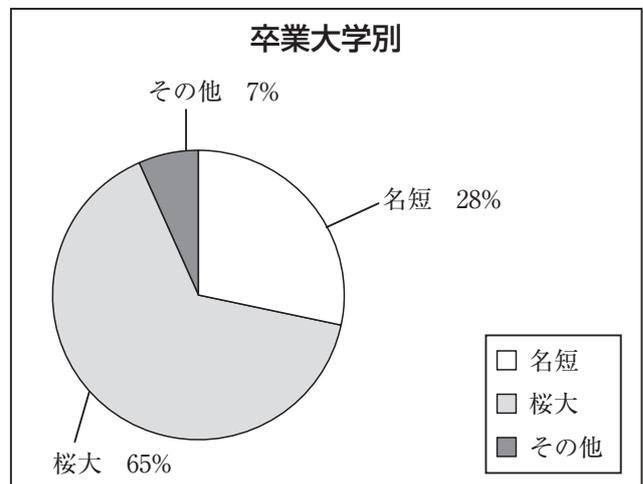
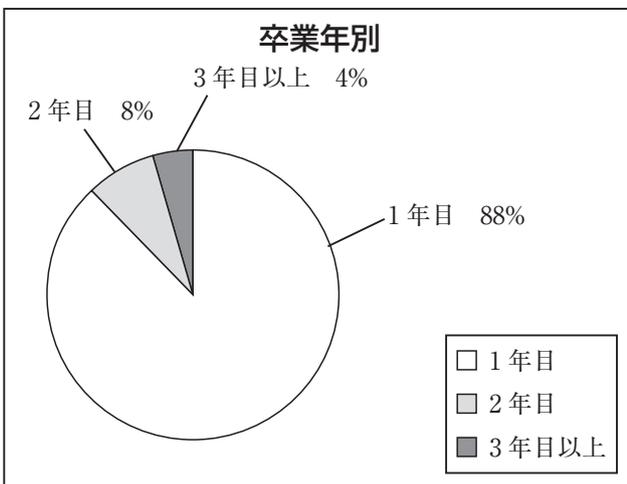
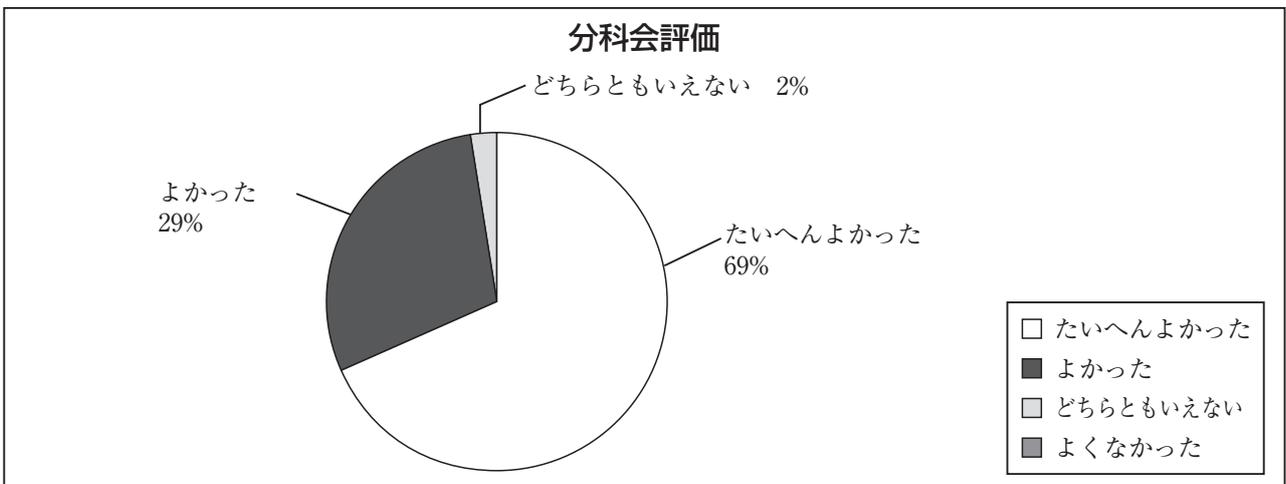
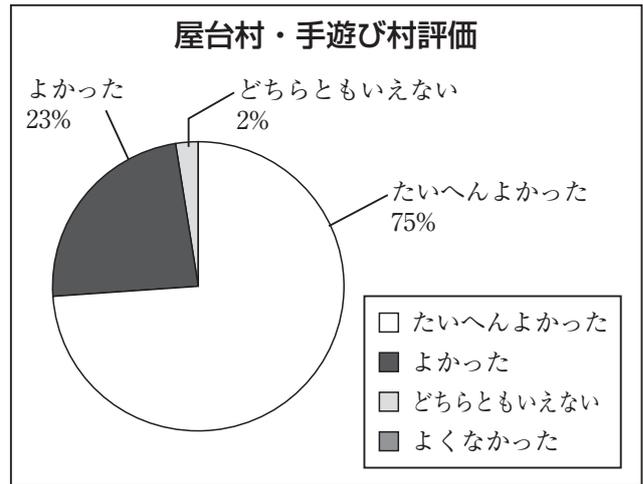
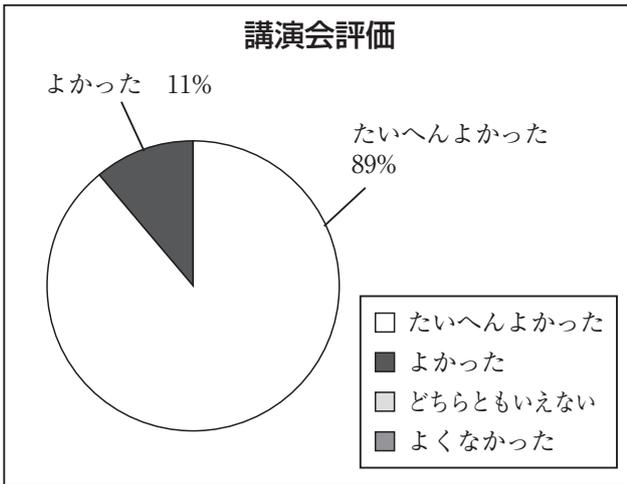
- (注1) 多田ヒロシ著『わいがわになる』 こだま社 1977
(注2) 五味太郎著『いっぼんばしわたる』 絵本館 1979

資料

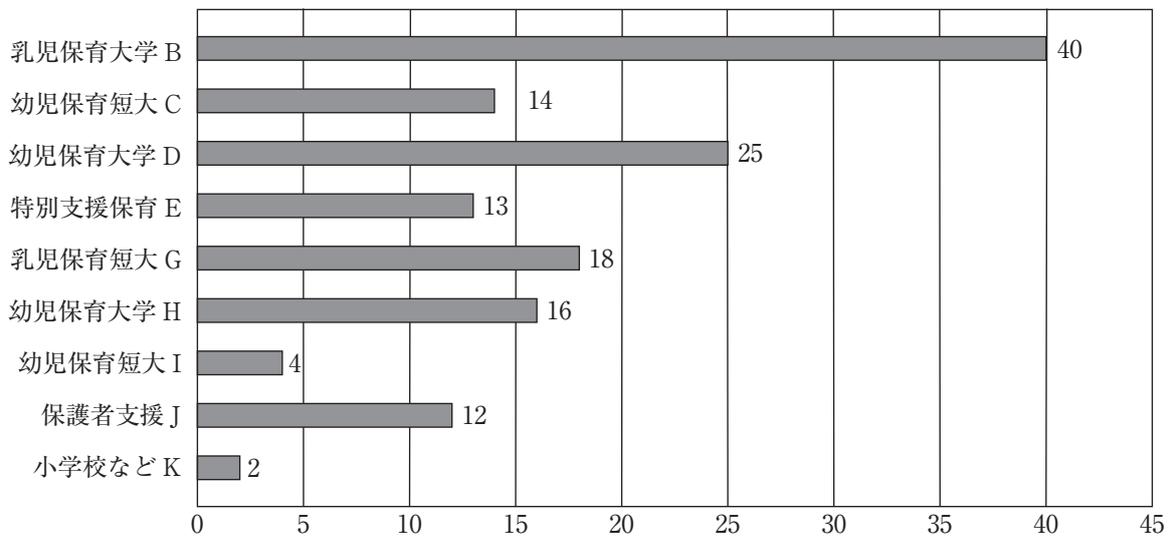
2012年度 事業報告

1 第10回夏季保育研究セミナー

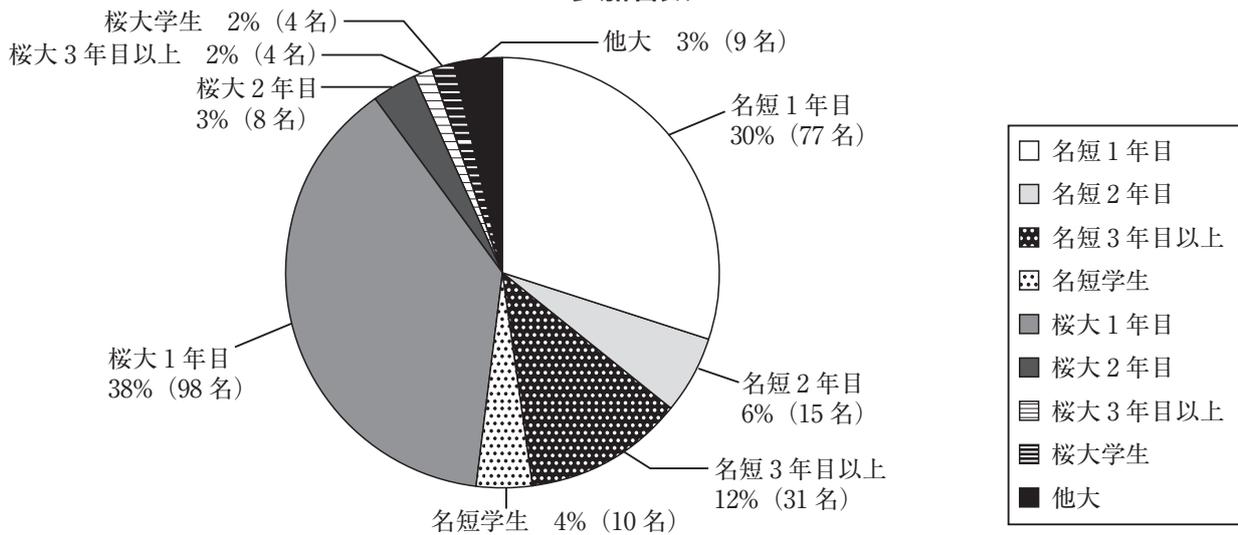
2012年度夏季保育研究セミナーアンケートグラフ



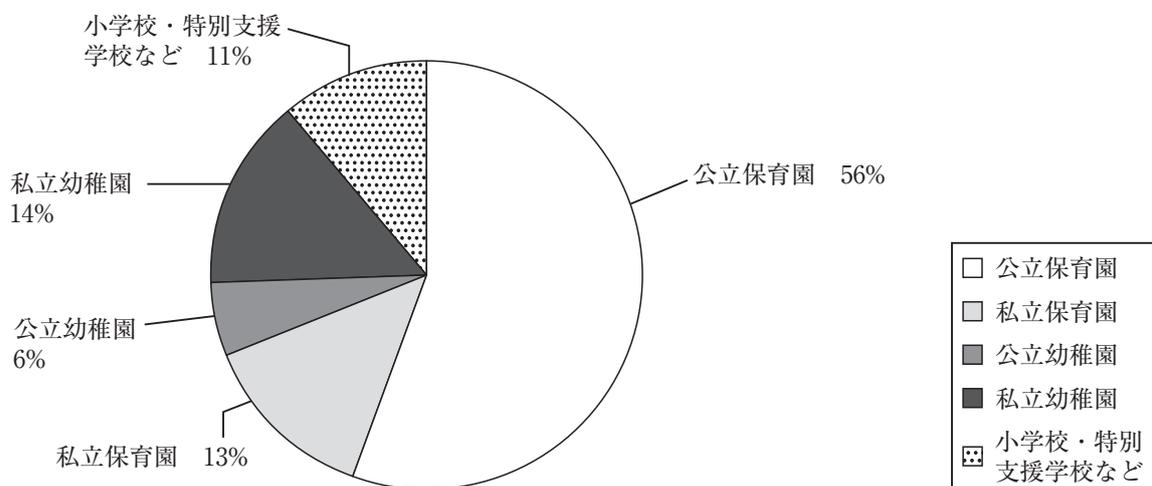
分科会別参加者数



参加者数



勤務先別参加者



2012年度夏季保育研究セミナーのアンケートから（感想・要望）

- ・とても楽しかったし、温かく迎えてもらえて嬉しかったです。明日から園で生かしていきたいです。
- ・久しぶりの学校、とても楽しかったです。明日からまた頑張れそうです。
- ・とても楽しかったです。みんなに会えて嬉しかった。来年度も参加します。
- ・みんなに会えて嬉しかった。大学って落ち着くんだなあ。気軽に来れる距離ではないのでこういう機会があるといい。
- ・手遊びをたくさん教えてもらい、これからの保育に活かせそうなのでよかった。また来年も参加したいです。
- ・楽しかったです。園でやってみたい遊び、手遊びが増えました。
- ・よかった。
- ・また来年参加したいです。
- ・桜花の友だち、先輩、先生に久しぶりに会えて涙が出ました。久しぶりに大学に来て学生の頃のようにとても楽しく過ごせました。桜花は私の自慢です。
- ・とっても楽しく参加させてもらいました。大学にいと学生時代を思い出し久しぶりに友だちと会える機会と同じような悩みを持っていると知ることができて、これからも仕事頑張ろうと思いました。
- ・久しぶりの学校は懐かしくてとても楽しかったです。一日学生気分は最高でした。もう一度学生やりたいな—と思いつつ、明日からも働きます。
- ・落ち込んでいた気持ちが少し元気になりました。ありがとうございました。
- ・同窓会みたいに友だちに会えてとてもよかったです。先生方の顔を見れたのも嬉しかったです。また遊びに来ます。
- ・頑張らないといけないな、と思いました。
- ・悩んでいたことを話すことができて良かった。また月曜日から頑張りたいです。
- ・屋台村全部まわれなかったのが残念。また来年も来たいです。
- ・小西先生のお話やる気になりました。
- ・とても楽しかったです。
- ・屋台村はもっとしぼって少ない項目で良かったと思う。
- ・屋台村・手遊び村がすごくよかったです。とても役に立ちました。
- ・いろいろな方の意見・悩みを聞いて良かったです。また明日から頑張ります。
- ・いろいろな園、いろいろな経験年数の方のお話が聞いて良かったです。このセミナーを受けたことで少なからず明日からの保育が変わると思います。
- ・自分の悩んでいることを話せて良かったです。また他にも同じようなことで悩んでいる人がいると言うこともわかりました。
- ・屋台村・手遊び村を始めるときに声かけが必要。
- ・いろいろな方の意見が聞いて良かったです。
- ・自分の中でもやもやしていた悩みが他の方から言葉に出して言ってもらったことで悩みが明確になりスッキリしました。
- ・楽しかったです。

-
- ・分科会では悩みを相談し合い仕事が大変辛いと思っているのは自分だけじゃないと分かって、また明日から頑張ろうと思えました。
 - ・久しぶりに学生気分で楽しかった。
 - ・久しぶりに友だち、先生に会えて嬉しかったです。本当に学生に戻った気分でした。
 - ・また次の機会も絶対参加したいです。
 - ・小西先生の講義、友だちに会えたこと、たくさん学んだことが本当に嬉しかったです。また来年来ます。
 - ・制作は、浅野先生の実践が簡単で楽しかった。
 - ・やっぱり学校は楽しいです。
 - ・来年も来たいです。
 - ・楽しかったです。
 - ・明日から実践したいことがたくさん学べました。
 - ・いろいろな人の話を聞いて共感できる内容の話があって、今日参加して本当に良かったと思いました。小西先生の講演を聞いて明日からまた頑張るぞという気力と勇気を再びもつことができました。
 - ・今の保育の悩みをいろいろな人と共感できたり、他の人の話も聞けて良かった。知らない手遊びも知ることができたので現場でやってみたいと思う。
 - ・同期の人と今の状況や悩みを話し合えて良かったです。とても充実した時間でした。明日から生かしていこうと思います。やっぱり桜花は落ち着きます。
 - ・現場の話がたくさん聞くことができ勉強になりました。
 - ・手遊びや遊べるおもちゃなどいろいろなことを学べて勉強になりました。
 - ・普段自分が忙しかったり友だちも忙しいだろうなと思ったりして、なかなか友だちと連絡を取らず皆元気かなと思っていたので今日元気な皆と話せて良かったです。
 - ・講師陣の熱意に感服、教え子を思う親心、次回も参加したいです。
 - ・実際に働いている先生たちの話をたくさん聞くことができとても勉強になりました。参考にして頑張りたいと思います。
 - ・分科会で現場の様子や悩みなど聞きたいことが聞けて参考になった。
 - ・保育士一年目で落ち込む時もありましたが、今日の会に参加して明日からまた頑張ろうという気持ちになれた。
 - ・皆さんの悩みが自分の悩みと同じだったり、共感できて元気が出たので参加できて良かったです。
 - ・明日から気持ちを新たにまた頑張っていきたいです。
 - ・様々の人の悩みや事例を聞くことができ現実を知ることができた。自分の将来に生かしたい。
 - ・講演会も分科会もとても楽しかったです。もっとたくさんお話を聞いたり他の分科会にも参加したかったです。
 - ・卒業生ではないですが、参加できて良かったです。
 - ・久しぶりに友だちに会えて、大好きな先生に会えて本当に楽しかったです。
 - ・今日の遊びを明日から生かしたいと思います。
 - ・とっても楽しかったです。
 - ・久々に桜花でいろんな話をきいてやっぱり保育っていいなって思えました。みんな頑張っているのに力をもらいました。
-

2. 2012年度研究所講演会のまとめ

今年度は、2012年12月9日、元 昭和音楽大学の田代康子氏をお迎えして、「絵本から広がる世界」というテーマで講演会を開催し、130名余りのみなさんの参加を得ました。今回の講演は、ご自身の保育園での実践研究に基づきながら、「読み聞かせ」でこそ味わえる絵本の醍醐味を、子どもの心の動きにとくに焦点をあててお話していただきました。映像を通して子どもたちの楽しい反応も見聞きでき、理解が深まりました。

参加者の声から、いくつか紹介させていただきます。

保・幼関係者：「実践にすぐ役立ちそうな内容でとてもよかったです。子育て支援センター勤務ですが、お母さんからの絵本の質問は多く、絵本の選び方の参考となりました。」「同じお話の内容でも、こんなに表現の仕方や文章の違いがあることを改めて学びました。普段何気なく読んでいた絵本でも、子どもたちにとっては、とても楽しい時間、発見の時間となっていることを改めて考えさせられました。絵本によって心の動く瞬間を共に感じて、仲間をつくったり、通じあったり・・・絵本の時間をもっと大切にしていこうと思いました。」

一般参加：「絵本からここまで広がるのは驚きでした。」「絵本を通してどんな小さな子どもでも仲間とたのしめる時間がもてる事の大切さがわかりました。」

学生：「保育実習などで絵本をたくさん読みましたが、このように子どもの目線に立って読み聞かせることができていなかったと思いました。これからは幼稚園実習があるので、今日学んだことを生かして上手に読み聞かせできるようにしたいと思いました。」「来年から保育者として働き始めますが、子どもと一緒にたくさんの絵本を通して思い出や遊び、経験をしていきたいと思いました。」

教職員：「絵本から共感が広がる素晴らしさを感じました。是非、文化をつくっていききたいですね。」

表) 2012年度田代康子先生講演会アンケート集計

アンケート回答者 内訳	本学との関係	数	講演内容について				
			大変 よかった	よかった	普通	あまりよく なかった	未記入
保育所・幼稚園 関係者	本学卒業生以外	32	25	7	0	0	0
保育所・幼稚園 関係者	本学卒業生	16	13	1	1	0	1
教職員（小・中・高・大）		1	0	1	0	0	0
一般参加・その他		14	13	1	0	0	0
他大学学生		20	19	1	0	0	0
本学学生		27	25	1	0	0	1
本学教職員 (非常勤講師の方を含む)		6	4	1	0	0	1
計		116	99	13	1	0	3
		100.0%	85.4%	11.2%	0.8%	0.0%	2.6%

(文責：布施 佐代子)

3. 子育て支援講座の開催について

	講師の氏名	テーマ	日程	参加人数
保育学部	辻岡 和代	親子クッキングーパート2ー	8月7日	9組23名
保育学部	田端 智美	はじめてのお絵かきー1・2歳児対象	10月16日	39組43名
保育科	高須 裕美	幼児の音楽あそび	11月27日	62組66名
保育科	原田 明美	育児も育自も楽しんで	2月14日	4組4名

4. 2012年度 子育て交流会・支援室開放の経過・参加人数・内容

4月11日(水) 第1回 子育て交流会(2歳児) 天気:雨
 子ども 9名 大人 7名 学生 19名(保育学部2年今野ゼミ)
 パネルシアター「だれがかじったかな?」(学生)
 手遊び「ひげじいさん」(学生)
 注意事項説明、スタッフ紹介
 手遊び「アンパンマン」
 絵本「おふとんかけたら」「こねこがにゃあ」(荒川)

4月12日(木) 第1回 支援室開放 天気:晴
 子ども 7名 大人 7名
 自由遊び

4月13日(金) 第2回 子育て交流会(1歳児) 天気:晴
 子ども 25名 大人 25名
 手遊び「あたまかたひざボン」
 スタッフ紹介
 親子遊び「バスにのって」「だるまさんが」
 絵本「だるまさんが」「なになな なになな」
 さよなら「アンパンマン」(荒川)

4月16日(月) 第2回 支援室開放 天気:くもり
 子ども 3名 大人 3名
 自由遊び

4月17日(火) 第3回 交流会(3歳児) 天気:晴
 子ども 3名 大人 3名
 手遊び「パンダうさぎコアラ」「アンパンマン」
 集団遊び「ロンドン橋」
 エプロンシアター「3びきのこぶた」
 手遊び「りんごがコロコロ」(水谷)

4月19日(木) 第3回 支援室開放 天気:晴
 子ども 14名 大人 14名 学生 1名(専攻科1年)
 自由遊び
 子どもの手先の使い方を記録する。その1(シール貼り)(学生)

4月20日(金) 第4回 交流会(0歳児) 天気:雨
 子ども 3名 大人 3名
 布を使って「うえからしたから」「たんぽたんぽぽ」
 親子遊び 膝のせ「うまはととし」
 お手玉 頭のせ「こんにちは」
 母親たちに「困っていることは?」
 親の指を使って起き上がりましょう!(上村)

子ども 9名 大人 8名
自由遊び

5月15日(火) 第11回 交流会(2歳児) 天気:雨

子ども 18名 大人 16名
集団遊び「大なみ小なみ」
手遊び「アンパンマン」「機関車」「りんごがコロコロ」
親子遊び「一本橋こちょこちょ」
ミニ工作「変身絵本」(水谷)

5月16日(水) 第12回 交流会(3歳児) 天気:晴

子ども 3名 大人 3名 学生 18名(保育学部2年石山ゼミ)
合奏・合唱「かえるの合唱」「かめの遠足」(学生)
手遊び「やさいのうた」
ふれあい遊び「バスにのって」
絵本「くんくんくん」
ごあいさつ「さよならあんころもち」(村井)

5月17日(木) 第9回 支援室開放 天気:晴

子ども 5名 大人 5名
自由遊び

5月18日(金) 第13回 交流会(0歳児) 天気:晴

子ども 2名 大人 2名
いないいないばあ遊び「かくかくかくれんぼ」
布を使って「うえからしたから大風こい」(上村)

5月21日(月) 第10回 支援室開放 天気:晴(金環日食)

子ども 8名 大人 7名
自由遊び

5月22日(火) 第14回 交流会(3歳児) 天気:くもりのち雨

子ども 3名 大人 3名
工作「紙皿の変身」
絵本「あめふりくまのこ」
手遊び「アンパンマン」「一本橋こちょこちょ」(水谷)

5月23日(水) 第15回 交流会(2歳児) 天気:晴

子ども 19名 大人 17名 学生 18名(保育学部2年小嶋ゼミ)
紙皿シアター
バルーン遊び(子どもをバルーンの中に入れ空間を楽しんでもらう)(学生)
絵本「だるまさんと」「くつついた」
親子遊び「おかあさんと」
手遊び「いとまき」おともだち ありさん くまさんのようふくをつくる
さようなら「アンパンマン」(荒川)

5月24日(木) 第11回 支援室開放 天気:晴

子ども 7名 大人 6名
自由遊び

5月25日(金) 第16回 交流会(1歳児) 天気:晴

子ども 36名 大人 36名
手遊び「くるくるくるではくしゅ」
かたつむりの脳トレ(母親対象)
カタツムリのシール貼り
親子遊び「きゅうりができた」(荒川)

5月28日(月) 第12回 支援室開放 天気:晴

子ども 10名 大人 10名
自由遊び

- 5月29日(火) 第17回 交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 25名 大人 23名
集団遊び「大なみ小なみ」
手遊び「パンダうさぎコアラ」「一本橋こちょこちょ」「あたまかたひぎボン」「アンパンマン」
「グーチョキパーで」
絵本「なにかしら」(水谷)
- 5月30日(水) 第18回 交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 39名 大人 38名 学生 18名(保育学部2年基村ゼミ)
ふれあい遊び「バスにのって」(学生)
手遊び「パンダうさぎコアラ」「アンパンマン」
紙芝居「ワンワンワン」(水谷)
- 5月31日(木) 第13回 支援室開放 天気:晴
来室者なし 普段できないおもちゃ、絵本の修理
- 6月1日(金) 第19回 交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 1名 大人 1名
あいさつ
手遊び「キャベツはキャッキャッキャツ」
絵本「かばくん」「はらぺこあおむし」(荒川)
- 6月4日(月) 第14回 支援室開放 天気:晴
子ども 8名 大人 7名
自由遊び
- 6月5日(火) 第20回 交流会(1歳児) 天気:くもり
子ども 20名 大人 20名
集団遊び「大なみ小なみ」
手遊び「一本橋こちょこちょ」「パンダうさぎコアラ」「りんごがコロコロ」「アンパンマン」
絵本「もうおきるかな?」(水谷)
- 6月6日(水) 第18回 交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 2名 大人 2名 学生 18名(保育学部2年田中ゼミ)
手遊び「大きくなったら何になる」「ひげじいさん」「アンパンマン」(学生)
うた遊び「やさいのうた」「バスにのって」
絵本「はらぺこあおむし」「せんろはつづく」
わらべうた「さよならあんころもち」(村井)
- 6月7日(木) 第15回 支援室開放 天気:晴
子ども 6名 大人 5名
自由遊び
- 6月8日(金) 第22回 交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 10名 大人 10名
うたに合わせてあいさつ
手遊び「いとまき」
手品「ひも、新聞紙」を使って
絵本「がちゃ がちゃ どんどん」
さよなら「アンパンマン」(荒川)
- 6月11日(月) 第16回 支援室開放 天気:くもり
子ども 8名 大人 7名
自由遊び
- 6月12日(火) 第23回 交流会(1歳児) 天気:くもりのち雨
子ども 16名 大人 16名
集団遊び「大なみ小なみ」
手遊び「一本橋こちょこちょ」「だるまさん」「アンパンマン」「りんごがコロコロ」
絵本「でてこい でてこい」(水谷)

- 6月13日(水) 第24回 交流会(0歳児) 天気:くもり
子ども 8名 大人 6名 学生 15名(保育学部2年藤田ゼミ)
学生参加(赤ちゃんをだっこしたり遊んでいる様子の見学)
追視遊び「かくかくかくれんぼ」
布を使って「うえからしたから大風こい」
熊のぬいぐるみを動かして「いないいないばあ」「たかいたかい」
親子遊び「こっちのたんぼや」
揺らし遊び「おんまさんのおけいこ」(上村)
- 6月14日(木) 第17回 支援室開放 天気:くもり
子ども 9名 大人 8名
自由遊び
- 6月18日(月) 第18回 支援室開放 天気:晴
子ども 12名 大人 10名
自由遊び
- 6月19日(火) 第25回 交流会(2歳児) 天気:台風接近中
子ども 14名 大人 13名
手遊び「バンダうさぎコアラ」「一本橋こちょこちょ」「あたまかたひざボン」「アンパンマン」
作って遊ぼう「牛乳パックを使ったカエル」(水谷)
- 6月20日(水) 第26回 交流会(3歳児) 天気:くもり
子ども 4名 大人 3名 学生 19名(保育学部2年中村ゼミ)
手遊び「ゲーとパー」「アンパンマン」(学生)
わらべうた「かくかくかくれんぼ」「キャーロノメダマニ〜」
手遊び「やさいのうた」
ふれあい遊び「バスにのって」
うた「かえるのうた」
絵本「まぐらのせんにん〜そこのあなたの巻」(村井)
- 6月21日(木) 第19回 支援室開放 天気:雨
子ども 4名 大人 4名
自由遊び
- 6月22日(金) 第27回 交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 16名 大人 15名
あいさつ おへんじ「はーい」
親子遊び「きゅうりができた」
絵本「おふとんかけたら」「がたん ごとん」
手遊び「パンのうた」
さようなら「アンパンマン」(荒川)
- 6月25日(月) 第20回 支援室開放 天気:くもりのち雨
子ども 9名 大人 9名
自由遊び
- 6月26日(火) 第28回 交流会(3歳児) 天気:くもりのち雨
子ども 4名 大人 3名
作って遊ぼう「牛乳パックを使ったカエルとヘビ」(水谷)
- 6月27日(水) 第29回 交流会(1歳児) 天気:くもり
子ども 19名 大人 19名 学生 16名(保育科1年原田ゼミ)
手遊び「むすんでひらいて」「ひつつきもつつき」(学生)
うた「かえるの合唱」
わらべうた「キャーロノメダマニ〜」
ふれあい遊び「バスにのって」
ペープサート「むすんでひらいて」
絵本「ぼんちんぱん」
ごあいさつ わらべうた「さよならあんころもち」(村井)

- 6月29日(木) 第30回 交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 32名 大人 28名
あいさつ
手遊び「あたまかたひぎボン」
ふれあい遊び「バスにのって」
パネルシアター「カレーライス」
注意事項 爪切りについて
さようなら「アンパンマン」(荒川)
- 7月3日(火) 第31回 交流会(1歳児) 天気:雨
子ども 22名 大人 22名
集団遊び「大なみ小なみ」「ロンドン橋」
手遊び「一本橋こちょこちょ」「りんごがコロコロ」「アンパンマン」
ペープサート「ことりのうた」
絵本「あっ!」(水谷)
- 7月4日(水) 第32回 交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 27名 大人 25名 学生 16名(保育科1年小川絢子ゼミ)
ペープサート、ふれあい遊び(学生)
ふれあい遊び「パンダうさぎコアラ」「バスにのって」
わらべうた「キャーロノメダマニ〜」
ごあいさつ「さよならあんころもち」(村井)
- 7月5日(木) 第21回 支援室開放 天気:くもり
子ども 13名 大人 11名
自由遊び
- 7月6日(金) 第33回 交流会(3歳児) 天気:晴時々くもりのち雨
子ども 4名 大人 3名
トイレに行こう
あいさつ お名前「はーい」
紙芝居「ごきげんのわるいコックさん」
手遊び「一本ばし 一本ばし」
水鉄砲であそぼう「的あて」
さよなら「アンパンマン」(荒川)
- 7月9日(月) 第22回 支援室開放 天気:晴
子ども 12名 大人 10名
自由遊び
- 7月10日(火) 第34回 交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 37名 大人 32名
水遊び
手遊び「パンダうさぎコアラ」「あたまかたひぎボン」「一本橋こちょこちょ」「アンパンマン」
絵本「ねないこだれだ」(水谷)
- 7月11日(水) 第35回 交流会(0歳児) 天気:晴
子ども 14名 大人 12名
手遊び「ちょちょちあわわ」
「ブーブー ベロベロ・・・」口をならして遊ぶ
ゆさぶりあそび「あんまんだぶり」わらべうた
追視遊び「かくかくかくれんぼ」「いないいないばあ」
布を使って「うえからしたから大風こい」
※「サイトメガウイルス」について(上村)
- 7月9日(木) 第23回 支援室開放 天気:雨
子ども 6名 大人 6名
自由遊び
- 7月13日(金) 第36回 交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 21名 大人 21名
-

あいさつ
 親子遊び「きゅうりができた」
 絵本「ぞうくんのさんぽ」
 水遊び シャワー、みずでっぼう、水かけなど
 ごあいさつ「さよならあんころもち」(荒川)

9月4日(火) 第37回 交流会(3歳児) 天気:くもりのち晴時々雨
 子ども 8名 大人 7名
 室内で「サーキット遊び」
 手遊び「グーチョコキパーで」「アンパンマン」
 絵本「へびのみこんだ なにのみこんだ」(水谷)

9月5日(水) 第38回 交流会(2歳児) 天気:晴
 子ども 22名 大人 19名 学生 16名(保育科1年神谷ゼミ)
 手遊び「キャベツのなかから」(学生)
 絵本「はらぺこあおむし」(学生)
 ふれあい遊び「かしてかして」「ばんばんぽー」「バスにのって」
 わらべうたあそび「かくかくかくれんぼ」人形をつかって
 ごあいさつ「さよならあんころもち」(村井)

9月6日(木) 第24回 支援室開放 天気:晴
 子ども 8名 大人 6名
 自由遊び

9月7日(金) 第39回 交流会(1歳児) 天気:晴
 子ども 21名 大人 21名
 あいさつ
 絵本「おふとんかけたら」「てんてんてん」
 親子遊び「ラララぞうきん」「バスにのって」
 さようなら「さよならあんころもち」(荒川)

9月10日(月) 第25回 支援室開放 天気:晴
 子ども 8名 大人 6名
 自由遊び

9月11日(火) 第40回 交流会(2歳児) 天気:雨のちくもり
 子ども 22名 大人 20名
 作って遊ぼう「牛乳パックのとんぼ」
 手遊び「アンパンマン」「あたまかたひざボン」「グーチョコキパーで」
 絵本「こやぎがめえめえ」(水谷)

9月12日(水) 第41回 交流会(0歳児) 天気:晴
 子ども 13名 大人 11名
 追視遊び「かくかくかくれんぼ」いないいない人形を使って
 「あんよをなげだすおさるさん」猿のぬいぐるみを使って言葉と行為の一致の大切さを紹介
 布を使って「うえからしたから大風こい」いないいないばあのあそび紹介
 「かむ」「体を動かす」五感・脳の発達の大切さの紹介 (上村)

9月13日(木) 第26回 支援室開放 天気:晴
 子ども 16名 大人 12名
 自由遊び

9月14日(金) 第42回 交流会(3歳児) 天気:晴風強し
 子ども 9名 大人 7名
 トイレに行こう
 あいさつ お名前「はーい」
 手遊び「キャベツはキャッキャッキャツ」
 紙芝居「こんにちは」「まだかなまーだかな」
 さようなら「さよならあんころもち」(荒川)

9月18日(火) 第43回 交流会(1歳児) 天気:雨のちくもり

子ども 8名 大人 8名
紙芝居「ワンワンワン」
手遊び「ぴったんこ」「あたまかたひざボン」「むすんでひらいて」
集団あそび「大なみ小なみ」(水谷)

9月19日(水) 第44回 交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 9名 大人 7名
わらべうた「ひとりきな」「かっくかっくかくれんぼ」
音楽あそび「ワニのおくち」「モミモミマッサージ」「やさいのうた」「バスにのって」
紙芝居「きかんしゃ ぼっぼくん」
ペープサート「むすんでひらいて」
あいさつ「さよならあんころもち」(村井)

9月20日(木) 第27回 支援室開放 天気:晴
子ども 8名 大人 6名
自由遊び

9月21日(金) 第45回 交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 23名 大人 20名
紙芝居「こんにちは」
お名前呼びます
親子あそび「きゅうりができた」
紙芝居「できたかな まーだかな」
手遊び「アンパンマン」(荒川)

9月24日(月) 第28回 支援室開放 天気:晴
子ども 10名 大人 9名
自由遊び

9月25日(火) 第46回 交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 10名 大人 8名
トイレに行こう
手遊び「アンパンマン」「ゲーチョコキパーで」
絵本「ぞうくんのおおかぜさんぼ」
作って遊ぼう「牛乳パックのとんぼ」(水谷)

9月26日(水) 第47回 交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 17名 大人 16名
わらべうた「ひとりきな」「かっくかっくかくれんぼ」
音楽あそび「やさいのうた」「バスにのって」
紙芝居「きかんしゃ ぼっぼくん」
あいさつ「さよならあんころもち」(村井)

9月27日(木) 第29回 支援室開放 天気:晴
子ども 8名 大人 6名
自由遊び

9月28日(金) 第48回 交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 29名 大人 29名
あいさつ
親子あそび「きゅうりができた」「バスにのって」
紙芝居「おくちをあ〜ん」
うた「しあわせならてをたたこう」
さようなら「アンパンマン」(荒川)

10月3日(水) 第49回 交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 25名 大人 22名
わらべうた「ひとりきな」「かっくかっくかくれんぼ」
ふれあいあそび「あぶくたった」
音楽あそび「かしてかして」「ばんばんぷー」「やさいのうた」「バスにのって」
パネル「まんまるちゃん」(村井)

- 10月4日(木) 第50回 交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 14名 大人 10名
トイレに行きましょう
手遊び「アンパンマン」「グーチョコキパーで」「パンダうさぎコアラ」「一本橋こちょこちょ」
「りんごがコロコロ」
絵本「しゅくだい」
体育あそび「一本のラインの上をあるこう」(水谷)
- 10月5日(金) 第51回 交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 18名 大人 17名
あいさつ
親子あそび「ラララぞうきん」「どんぐり」
紙芝居「ねんね ねんね」
うた「しあわせならてをたたこう」
さようなら「アンパンマン」(荒川)
- 10月10日(水) 第52回 交流会(0歳児) 天気:晴
子ども 10名 大人 10名 学生 15名(保育科1年高橋ゼミ)
11ヶ月児がたくさんいたので注目できるものから始める
学生参加(遊んでいる様子の見学)
追視遊び「かくかくかくれんぼ」
布でぬいぐるみの熊を隠す。布を使って「うえからしたから大風こい」子どもを隠す。
「いないいないばあ」あそびを楽しむ。
ゆさぶりあそび「ゆすりゃ ゆすりゃ」
くすぐりあそび「一本橋こちょこちょ」(上村)
- 10月11日(木) 第53回 交流会(2歳児) 天気:くもりのち晴
子ども 24名 大人 20名
集団あそび「大なみ小なみ」
手遊び「一本橋こちょこちょ」「りんごがコロコロ」「あたまかたひざポン」「アンパンマン」
絵本「おふろだ、おふろだ!」(水谷)
- 10月12日(金) 第54回 交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 9名 大人 7名
トイレに行こう
あいさつ お名前「はーい」自分の名前にシールをはる
手遊び「キャベツはキャッキャッキャツ」「やきいもジャンケン」
親子あそび「バスにのって」
絵本「さつまのおいも」
さようなら「アンパンマン」(荒川)
- 10月15日(月) 第30回 支援室開放 天気:晴
子ども 9名 大人 7名
自由あそび
- 10月17日(水) 第55回 交流会(3歳児) 天気:雨
子ども 4名 大人 3名 学生 17名(保育科1年高田ゼミ)
手遊び「グーチョコキパーで」(学生)
新聞紙で「かぶと、木、帽子、Tシャツ」を作って遊ぶ(学生)
わらべうた「さよならあんころもち」(村井)
- 10月18日(木) 第31回 支援室開放 天気:雨
子ども 9名 大人 7名
自由あそび
- 10月19日(金) 第56回 交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 19名 大人 16名
あいさつ「めのみどあけろ」
名前呼び
親子あそび「どんぐり」
絵本「だれかなだれかな」

ペープサート「だれかなだれかな」
さようなら「アンパンマン」(荒川)

10月22日(月) 第32回 支援室開放 天気：晴
子ども 12名 大人 10名
自由あそび

10月24日(水) 第57回 交流会(1歳児) 天気：晴
子ども 17名 大人 17名 学生 15名(保育科1年近藤ゼミ)
学生参加(子どもの様子の見学)
わらべうた「ひとりきな」「かっくかっくかくれんぼ」
手遊び「かしてかして」「ばんばんぷー」
ふれあいあそび「バスにのって」
ペープサート「まんまるちゃん」
ごあいさつ「さよならあんころもち」(村井)

10月25日(木) 第58回 交流会(2歳児) 天気：晴
子ども 18名 大人 16名
集団あそび「大なみ小なみ」
親子あそび「おうまの親子」
作って遊ぼう「バナナ」
手遊び「りんごがコロコロ」「一本橋こちょこちょ」「アンパンマン」
絵本「くだもの」(水谷)

10月26日(金) 第59回 交流会(3歳児) 天気：晴
子ども 9名 大人 8名
集まった子から「1本ばし1本ばし」をする
トイレに行く
名前を呼んでシールをはる
絵本「おつきさまこんばんは」
手遊び「キャベツはキャッキョッキョ」
ペープサート「いわしのひらき」(荒川)

10月29日(月) 第33回 支援室開放 天気：晴
子ども 10名 大人 9名
自由あそび

10月31日(水) 第60回 交流会(1歳児) 天気：晴
子ども 18名 大人 18名 学生 16名(保育科1年上野ゼミ)
手遊び「キャベツ」「焼き芋グーチョコキパー」(学生)
音楽「かしてかして」
ふれあいあそび「バスにのって」
いやし棒を使って「ひらいたひらいた」
ペープサート「まんまるちゃん」
ごあいさつ「さよならあんころもち」(村井)

11月1日(木) 第34回 支援室開放 天気：晴
子ども 5名 大人 4名
自由あそび

11月2日(金) 第61回 交流会(3歳児) 天気：晴
子ども 13名 大人 10名
集まった子から「1本ばし1本ばし」「やきいもジャンケン」をする
トイレに行く
名前を呼んでシールをはる
手遊び「いわしのひらき」
エプロンシアター「ももたろう」
手遊び「キャベツはキャッキョッキョ」「ひげじいさん」(荒川)

11月5日(月) 第35回 支援室開放 天気：晴
子ども 9名 大人 6名

自由あそび

- 11月6日(火) 第62回 交流会(1歳児) 天気:くもり
子ども 13名 大人 13名
集団あそび「大なみ小なみ」
作って遊ぼう「どんぐりとお米のマラカス」
絵本「でてこいでてこい」
手遊び「アンパンマン」(水谷)
- 11月7日(水) 第63回 交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 27名 大人 23名 学生 16名(保育科1年岡林ゼミ)
導入 いやし棒を使って「ひらいたひらいた」
手遊び「ひげじいさん」(学生)
歌「むすんでひらいて」(学生)
わらべうた「かっくかっくかくれんぼ」「だいこんつけ」
音楽 ふれあいあそび「やさいのうた」「かしてかして」「ばんばんぷー」「バスにのって」
紙芝居「げんきなポップくん」「おおきくおおきくおおきなあれ」
ごあいさつ「さよならあんころもち」(村井)
- 11月8日(木) 第36回 支援室開放 天気:晴
子ども 11名 大人 10名
自由あそび
- 11月10日(土) 第37回(大学祭) 支援室開放 天気:晴
子ども 13名 大人 12名
自由あそび
- 11月11日(日) 第38回(大学祭) 支援室開放 天気:くもりのち雨
子ども 4名 大人 4名 見学高校生 8名 親 1名
自由あそび
- 11月13日(火) 第64回 交流会(3歳児) 天気:くもり
子ども 12名 大人 11名
集まった子から「グーチョキパーで」「アンパンマン」「一本橋こちょこちょ」をする
トイレに行く
バスタオルでぶらんこ
絵本「おおきなかぶ」(水谷)
- 11月14日(水) 第65回 交流会(0歳児) 天気:くもりのち晴
子ども 8名 大人 8名
追視遊び「かくかくかくれんぼ」 いないいないばあ人形を使って
布でぬいぐるみの熊を隠し、いないいないばあ。
布を使って「うえからしたから大風こい」子どもを隠す。
お手玉「せんしゅかんのんさん」
膝のせあそび「おでんでんぐるま」
ゆらしあそび「このここのこ」(上村)
- 11月16日(金) 第66回 交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 7名 大人 6名
親子あそび「どんぐり」
紙芝居「はーい」
お名前呼びます
大型絵本「もこもこ」
親子あそび「ペンギンさんの山のほり」「大きな栗の木の下で」
さようなら「アンパンマン」(荒川)
- 11月19日(月) 第39回 支援室開放 天気:晴
子ども 13名 大人 11名
自由あそび
- 11月20日(火) 第67回 交流会(2歳児) 天気:晴

子ども 20名 大人 17名 学生 6名 (保育科2年高須ゼミ)
親子あそび「やきいもグーチャーパー」(学生)
ふれあいあそび「みそしる」(学生)
大型絵本「はらぺこあおむし」歌(学生)
芝生広場にて落ち葉で「そり」あそび(水谷)

11月21日(水) 第68回 交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 16名 大人 10名
芝生広場にて落ち葉で「そり」あそび
わらべうた「かっくかっくかくれんぼ」「あぶくたった」
音楽「ワニのおくち」「モミモミマッサージ」「やさいのうた」「バスにのって」
大型絵本「おべんとくん」
ごあいさつ「にぎりばっちり」「さよならあんころもち」(村井)

11月22日(木) 第40回 支援室開放 天気:くもりのち晴
子ども 6名 大人 5名
自由あそび

11月26日(月) 第41回 支援室開放 天気:雨
子ども 1名 大人 1名
自由あそび

11月27日(火) 第69回 交流会(1～3歳児) 天気:晴(幼稚園ホール)
子ども 66名 大人 62名 学生 18名(専攻科2年)
手遊び「パンダうさぎコアラ」「アンパンマン」「グーチョコキパーで」(水谷)
「幼児の音楽あそび」(高須先生と学生)

11月28日(水) 第70回 交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 8名 大人 8名 学生 14名(保育科1年鏡ゼミ)
手遊び「ころころたまご」「アンパンマン」(学生)
導入 いやし棒を使って「ひらいたひらいた」
わらべうた「かっくかっくかくれんぼ」
音楽 ふれあいあそび「かしてかして」「ばんばんぶー」「バスにのって」
オーボールを使って「どんないろがすき」
大型絵本「だるまさんが」
ごあいさつ「さよならあんころもち」(村井)

11月29日(木) 第42回 支援室開放 天気:晴
子ども 6名 大人 4名
自由あそび

11月30日(金) 第71回 交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 19名 大人 17名 学生 2名(保育科2年山下ゼミ、大学院1年)
学生はアンケート調査、院生は見学
ふれあいあそび「みそしる」「パンダうさぎコアラ」「アンパンマン」
色画用紙でリース作り(水谷)

12月4日(火) 第72回 交流会(0～3歳児) 天気:晴(クリスマス会 幼稚園ホール)
子ども 73名 大人 68名 学生 26名(保育学部4年基村ゼミ 8名、専攻科 18名)
手遊び「パンダうさぎコアラ」「一本橋こちょこちょ」「アンパンマン」(水谷)
音楽劇「美女と野獣」(学生基村ゼミ)

12月5日(水) 第73回 交流会(3歳児) 天気:晴
子ども 6名 大人 6名
トイレに行く
わらべうた「かっくかっくかくれんぼ」
ふれあいあそび「サンタさんどこいくの?」
音楽「かしてかして」「やさいのうた」「バスにのって」
絵本「まどからおくりもの」
パネルシアター「どんないろがすき」
色画用紙でリース作り

ごあいさつ「さよならあんころもち」(村井)

12月6日(木) 第43回 支援室開放 天気:晴
子ども 6名 大人 5名
自由あそび

12月7日(金) 第74回 交流会(1歳児) 天気:晴
子ども 8名 大人 8名 学生 2名(保育科2年山下ゼミ)
学生はアンケート調査
あいさつ
紙芝居「はーい」
名前呼び
親子あそび「ペンギンさんの山のほり」「バスにのって」
紙芝居「おいしいおいしい」
手遊び「アンパンマン」(荒川)

12月10日(月) 第44回 支援室開放 天気:雪
子ども 5名 大人 3名
自由あそび

12月11日(火) 第75回 交流会(2歳児) 天気:晴
子ども 21名 大人 17名 学生 4名(専攻科1年)
親子あそび「かじやの子」
大型絵本「ころころころ」
マジックボックス「折り紙のサンタさん」をプレゼントする。
サンタさんの仕上げでシール貼り
歌「あわてんぼうのサンタクロース」以上(学生)
手遊び「パンダうさぎコアラ」「アンパンマン」
あいさつ 今年は今日でおわりです。また来年～
注意事項 (水谷)

12月12日(水) 第76回 交流会(0歳児) 天気:晴
子ども 3名 大人 3名
それぞれ興味のある事で遊んでもらった。
外も暖かくはいはいするのが気持ちよく日光浴できた。
追視遊び「かくかくかくれんぼ」かくれんぼ人形を使って。
お手玉、洗面器の遊び方紹介
※「電気ケトルのやけど」新聞記事の紹介 (上村)

1月9日(水)、1月10日(木)、1月11日(金)、1月15日(火)、1月16日(水)、1月17日(木)、1月18日(金)、
1月21日(月)、1月22日(火)、1月23日(水)、1月24日(木)、1月25日(金)、1月28日(月)、1月29日(火)、
2月4日(月)、2月5日(火)、2月6日(水)、2月12日(火)、2月13日(水)、2月14日(木)、2月15日(金)、
2月18日(月)、2月19日(火)、2月20日(水)、2月22日(金)、2月25日(月)、2月26日(火)、2月27日(水)、
2月28日(木)、3月1日(金)、3月5日(火)、3月6日(水)、3月7日(木)、3月8日(金)、3月11日(月)、
3月13日(水)、3月14日(木)、3月16日(金)



< 2012年度 研究所役員体制 >

保育子育て研究所

所長 野津 牧
主任研究員 岡林恭子
主任研究員 神谷妃登美
事務職員 馬場美津子

教育保育研究所

所長 中村淳子
主任研究員 金子幾之輔
主任研究員 今野正良
主任研究員 布施佐代子

保育子育て研究所
教育保育研究所 年報第10号

執筆者	中村 淳子	桜花学園大学保育学部	教授
	神谷 妃登美	名古屋短期大学保育科	教授
	田代 康子	元 昭和音楽大学	教授
	布施 佐代子	桜花学園大学保育学部	教授
	嶋守 さやか	桜花学園大学保育学部	准教授
	青木 佐和・伊藤 絵里・八反 彩織	桜花学園大学保育学部	学生
	高須 裕美	名古屋短期大学保育科	講師
	古田 美津子	名古屋市九番保育園	園長

(掲載順)

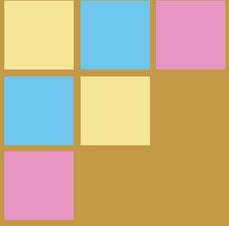
編集後記

「はじめに」で中村先生の記述がありますように、2012年4月1日より桜花学園大学に教育保育研究所が設置されることとなりました。2012年度、保育子育て研究所と教育保育研究所は、名古屋キャンパスの教職員・学生・卒業生・ボランティアスタッフが連携して活動を進めてきました。

2012年7月の夏季保育研究セミナーでは、小西由利子先生から元気をもらえるお話をいただきました。実践屋台村、各分科会でも、卒業生の笑顔が溢れていました。また、卒業生等が多数参加して行われた講演会では、田代康子先生に「絵本から広がる世界」について魅力的なお話を伺うことができました。嶋守先生の研究報告「スウェーデンの環境教育、『森のムッレ教室』を实践して」、高須先生の同「『共に共有する』音楽づくりを考える」、古田先生の実践報告「いっぽんばしわたる—絵本のイメージを表現してみよう—」について、各先生の保育に関わる世界がいきいきと描かれています。ぜひ御一読ください。

保育子育て研究所 年報 第10号 (2012年度) 教育保育研究所

発行者	名古屋短期大学 保育子育て研究所 桜花学園大学 教育保育研究所
発行年月日	2013年3月31日
住所	〒470-1193 愛知県豊明市栄町武侍48 桜花学園大学 名古屋短期大学内
電話	0562-97-1306
FAX	0562-98-1162
HP	http://www.ohkagakuen-u.ac.jp/koso/home.html
印刷	(株) シイエム・シイ



名古屋短期大学保育子育て研究所
桜花学園大学教育保育研究所

